

蓋し足利の末葉、將軍の武運漸く衰ふると共に、諸事形式に流れ、一にも古典、二にも儀式、上下一切の事、虚禮にあらざれば虚飾に亘らざるはなし、随つて儀式典禮の一法を知らざれば武人の資格なしと擯斥するの有様なりき、信長は這の虚禮虚飾を厭いたり、憎みたり、呪ひたり、萬事足利流の生命なき公卿風に反抗するの結果、赤裸々なる平民主義の實行者とはなりぬ、而して新時代の武人として、新時代の精神を流布するに努めたりき。

中年後、天下の大半を平定せし頃は、氣稍や傲りて苛察に流れ、動もすれば猜疑心に驅れて、衆人稠座の前に人を面責し、怒號し、擊撲して假す所なかりき、所謂癩瘡玉が起れば如何なる場合にも爆發せしむるを禁せざりき、一面には臣下を精選して、之に信頼する長所を有せしと同時に、他の一面には苛酷峻烈にして、疑心起れば直に刃を抜くの缺點を免

れざりき、此缺點は纏て英僧安國寺惠瓊をして『高きろびにころび落つべし』と豫測せしめたる所以に外ならず、而して光秀の性格は奈何光秀は固と名門の出なり、足利時代の陳腐なる空氣中に人となり、一舉一動所謂古典古式の型に囚はれ、跌座して人と對談するなどは思ひも寄らずとする舊時代の見なり、その上神經過敏にして克く衆望を得る能はず、信長に臣とし仕ふるも、私に信長の野性を陋として、自己の古雅なるを誇りとし、加之猜疑深き信長の、何時自己を害するやも測られじとの不安の念は終始胸中を去る能はざりし也。

兩者既に性格の上に大膽と小膽との差あり、粗豪と慎密との差あり、風流と不風流との差あり、道の黑白相容れざる氷炭の争でか永く結合するの理あらんや。

而して、信長は中國攻の後詰として徳川家康を駿州より迎ふるに至

り、光秀に命ずるに之れが接待係を以てしぬ、光秀、朝の古式を重んずる所より、家康を遇する甚だ丁重を極めたるが、却て信長の反感を買ふの原因となりて、豊懸の役に代ふるに、中國出陣の一部將を以てせられき、茲に於てか光秀の不安は一層著められ、我將に死を宣せらるべしと危惧せしが、これを本能寺の變を惹起すの端緒とも謂つべき乎。

五月下旬、信長毛利氏を討つべく江州安土の居城を發して、子息信忠と俱に上洛したり、信長は本能寺を旅營と定め、信忠は二條の城に入りたるが、素とこれ自領内の一地より一地に入るの旅行に過ぎざれば、信長の馬廻りは僅に百六十七騎を數へしのみ、時は夏なり、一同炎暑を厭ふ素肌の帷子に、信長は此時右大臣の榮官を帯びたれば、隨從の士官すべて公卿風の武裝堅からざる打份にてありき。

當時明智光秀は、主に對する不安の念に驅られつゝ、中國出陣の準備

中なりしが、偶々連歌の會を以て愛宕山に登りぬ、伏して洛中を望めば、本能寺邊信長の兵、僅に百餘騎にすぎず、而も前述の如き手薄の有様を見るや、平素の不安に打克たんと、一念發然として勃起し、「時は今、乘ずべき此機を逸して又何時かは身を保つべき時や、如かず先んじて彼を制せんのみ」との叛意、萬一を僥倖するの野心と共に併發するに至りぬ。

愆くて六月二日早曉、信長を本能寺に、信忠を二條の城に、一舉急襲して父子共に自刃するの已むなきに至らしめ、一瞬にしてその隱謀は遂げられき、本能寺の一戰、明智の爲には淺慮嗤ふべく、信長の爲には偏に弔すべく、而して秀吉の爲には大に祝すべき也。

### ◎鳴川及び洛の東北

鴨川の美は婦人の帯の如し——一流一淀これ自然の大文章——圓山は京

都人の性格——比叡山の景と主要なる史蹟——厄介千萬の山法師

日本婦人の服装美は帯によつて保たる、綾羅錦繡の伊達を盡すと雖も、その中心美を保つべき帯の調和を得ざらんには、折角の服装も形無しとならざるを得ず、京都の鴨川は這の婦人の帯の如し、洛東洛西の市街を横断して、南は愛宕山麓より北は出町橋に至つて二條に岐る、緑柳紅花の巻に一線の白晒を帯びて千古淡如として盡さず、尙ほ人體を一貫するの大動脈にも比すべき乎、京都に於ける鴨川の價値は、東京に於ける隅田川よりも、大阪に於ける淀川よりも、更に大に貴しとせざるを得ず、水淺ければ水利の便に於て彼に一步を輸すと雖も、其市街を彩る點に於て、其山紫の美を應照する點に於て、將又千餘年の歴史を語る點に於て、鴨川在つての京都と謂つべき也。

花に好く、月に良く、雪に美しく、納涼に佳く、歌に善く、詩に能く、詐諧に可く、鴨川の一流一淀は悉く皆な自然の文章ならざるはなし、故に京都に至つて此河の美を説くは尙ほ吉野に到つて櫻花の美を賞するよりも、平凡の事柄に屬す。

白河法皇の御心に任せぬものとして『双六の賽叡山の僧加茂川の水』と歎じ給ひけん如く、昔は防鴨河使の職を置かれし程の暴河なりけるが、幾多戦亂の舞臺に供せられしと、幾多風流人の觀賞用との爲に、時は暴河をして温河たらしめ、歴史は狂河をして美河たらしめたり、而して史蹟としての鴨河は、遷都以來、今に至るまで一として史に關係せざるはなし、故に之を架説するの愚を避けん。

既に加茂の名流あり、橋なかるべからず、架するに十餘橋あれど、其最も著はるゝは三條、四條、五條の橋なりとす、就中四條の橋は京都唯一の

鐵橋にして、鴨東に通ずるの要路を占む、橋上に立つて東を望めば、三十六峰の容姿紫色を呈して、圓山の樓、清水の塔を翠巒の下に指呼すべし、鐵欄の上には高く八基の電燈を掲げ、張るに紅白の玻璃を以てす。深夜鴨流を眺むれば、蛟龍一條水上におどり、戯れに數個の金球を弄するに似たり。橋西は先斗町、橋東は祇園新地の柳巷に接し、納涼の頃最も賑ひ、漫ろに遊客の魂を失はしむ。

四條橋よりも更に風趣に富むは三橋大橋となす、これ京洛の中心點にして、里程は皆な此橋を以て標準とし、東山の風景を一眸の中に收む、天正十八年、豐臣秀吉が増田長盛に命じて創造せしめたる橋也、磐石の礎地に入ること五尋、石柱六十三本、之を以て石柱の嚆矢と傳ふ、勤王の志士、高山彦九郎が泣いて皇居を遙拜したるはこの橋なり。

義經の牛若丸と武藏坊辨慶とが白刃を交へて遂に「辨慶あやまる

五條橋」と謠はる、五條橋は、京都第一の長橋にして、三條、四條と共に鴨川を築えしむる橋也、之も亦秀吉の築造にかゝり、後改架せしものなるが、當時秀吉が如何に交通の利便及び土木事業に盡力せしやを窺ふに足るべし。

既に川の京都あり、橋の京都あり、而して山水の美を完成すべく點晴の背景なかるべからず、即ち洛東諸山の三十六峯を代表する東山これ也。北は如意嶽に起つて、南は稻荷三ヶ峰に圓軀を横ふ、「蒲團さて寝たる姿や」の一句より俗に寝姿山とも稱す、地勢を以て人心を卜ふ、蓋し東山は京都人を最も具體的に表現せしもの也、優美にして因循、圭角なくして姑息なる、自然の景能く人を説明して、遺憾なし、遮莫、是より三條橋を起點として洛の東北部を探らんか。

三條を發して仁王門通りを東に行けば、桓武天皇を奉祀する平安神

宮あり、此の宮の附近には僧俊寛の住せし満願寺の舊蹟あり、それより  
疏水のインクテインに、船の山に上るを見て、橋を東に渡れば、往時、龜  
山天皇の離宮たりし南禪寺の境内あり、夏は納涼、秋は蟲の音、萩によく  
頗る幽邃なり、龜山天皇、後嵯峨皇后の御陵を初め、細川幽齋、梁川星巖  
横井小楠、その他名士の墳墓を以て充さる。

南禪寺より北すれば、彼の俊寛僧都が山莊の會合にて有名なる鹿ヶ  
谷の舊蹟あり、更に北進すれば、足利將軍義政の建立せる銀閣寺あり、こ  
れより西して吉田町に至れば、紅葉に名ある吉田神社あり、更に黒谷に  
轉すれば、洛東の大伽藍にて、熊谷蓮生坊直實が通世せる光明寺の諸堂  
宇あり、境内の西丘に上れば、洛中は更なり、遙に淀、鳥羽の遠景を一眸に  
納むるを得べし、それより加茂川縁を傳ふて北に行けば、芭蕉、蕪村、丈山  
月溪等の古蹟ある一乗寺村あり、更に修學院村に至れば、後水尾天皇の

離宮の跡あり、深遠幽雅なる高丘にして有名の音羽瀧に接す、靈元天皇  
の御詠に「遠方の山より上に雲より白きを見れば、淀の川水」と宣  
ひしは、蓋し實景也。

洛北糺の森に行けば、賀茂御祖神を祀る下鴨神社あり、又一覽の價な  
しとせず、これより西北に野道を辿れば、俗に中加茂と稱する上賀茂神  
社に至るべし、茲より西、出雲橋を渡れば、牛若丸と大僧正とを聯想すべ  
き鞍馬寺あり、境内には鬼一法眼の墓、涙の瀧、牛若丸の學問所、清少納言  
の遺蹟等あり。

洛北より躰を廻らして歸途に就くに際し、道すがら市内の主なる名  
所史蹟を探るべく、茲に一括して擧げん、今出川北三町の阿彌陀寺には  
織田信長父子及び森蘭丸の墓あり、小川頭には日蓮宗の本山妙顯寺及  
び妙覺寺あり、共に名士の墳墓少なからず、又天神横町に入れば、淺野長

矩並に四十七義士の塔及び其遺物を藏する瑞光院あり、請ふて一覽すれば亦史料を發見すべき乎、以上は洛の東北部に於ける主なる遊覽所に屬す、而して此方面に關する案内を終るに臨み、最も主要なる史蹟の一として比叡山を加へざる可からず。

京都の東北に登え、城江二州に跨つて洛の内外を睨下し、巍然として一敵國の觀をなすもの、之を本朝五岳の一に數へらるゝ叡山とす、山甚だ高からずと雖も、紫匂ふが中に平安の古都を望み、後ろに琵琶湖を瞰視して、一たび此山に登れば、身は宛としてパヲノマ中に入るの感を覺ゆ、桓武翼都の當初、天皇特に傳教大師に勅して伽藍を其山巔に搦め、以て帝都の鎮護たらしむ、延曆寺即ちこれ也。

比叡、一に日枝とも云ひ、又我立杣ともいひて歌俳中のもとなり、世俗叡山と稱す、山城より此山に上る二路あり、一は修學院の東、雲母阪よ

りし、一は八瀬よりす、八瀬よりする者は、先づ横川に入り、雲母阪よりするものは無動寺に至つて次に東塔に入るべし、而して此山に三大塔あり、一は西塔、一は東塔、一は横川塔となす、山中名所古蹟多くして枚舉するに遑なし、老杉喬松峰を掩ひ谷を埋めて陰森晝尙は暗き所あり、秀巒峻嶽雲を貫いて天に冲し、明皓濶如たるところあり、其最も高きは四明ヶ嶽の頂巔にして、海拔二千七百尺、快晴の日は遠く四國の諸山を望むを得べし。

奈良に興福寺あつて南都を代表するが如く、叡山に延曆寺あつて史蹟を代表す、平安朝の頃、延曆寺最も隆盛を極め、特に僧兵を設けて山門の衆徒と名けしが、奈良東大寺、興福寺、三井寺、園城寺も亦之に倣ふて各數千の兵を養ひ、晝夕武事を講じ、暴威を逞うして朝廷及び専門の武人を惱ませしと甚ならず、偶々興福寺の僧兵が祇園の社を侮辱せしを

憤り、延暦寺の僧數千、北野の神輿を奉じ、闕に到りて之を訴ふ。朝廷源爲義、平正盛に命じて之を拒がしめ、且つ二寺に命じて和解せしめんと諭されしが、二寺詔を奉せず、争鬭の餘波を市内に及ぼし、火を放ち、物を掠め、甚だしきは御陵を發く無道漢さへあり、朝野共に其凶暴に苦しませるはなし、既にして延暦寺また園城寺と隙を生じ、敵寺に火を放つて之を焼きたるにぞ、園城寺も亦叡山に放火して其堂宇を烏有に歸せしむ。茲に於てか三寺交々兵を構へて、幾萬の佛弟子は悉く阿修羅鬼と化す。加之少しく意に満たざる事あれば直ちに神輿を奉じて朝廷に迫る。白河法皇の鴨川の水、双六の賽と共に、山法師を不如意のもの、と嘆せられけんも宜なり、實に厄介至極の坊主共にてありしが、兎に角保元平治の戦亂以來、日本の戦史上、重要なる潜勢力を有せし事を忘るべからず。比叡山に就て語るべき史蹟は、一延暦寺に止まらずと雖も、他は煩に

堪へざるを以て略し、更に方面を替へて、洛の東南部に移らん。

◎洛東洛南の名所史蹟

祇園の美人と圓山方面——方廣寺の鐘と秀吉家康の人物——一點の紅な  
交へざる小仙境

三條大橋を發起として洛の内外を探勝すべき事は前に述べたるが如し、これより京洛中最も曳筈の地多き東南部、即ち東山方面に屬する神佛史蹟の要を擧げんとす、先づ正東の方より訪ねんに青蓮院の南に、淨土宗の總本山たる洛東第一の巨刹、華頂山知恩院あり、徳川秀忠の建立にて、其結構の壯麗なる、強ち善男善女の渴仰に價するに止らざるものあり、門内數百株の櫻を植えて春の美を誇り、名けて櫻の馬場と稱す。知恩院の南門を出づれば、圓山公園は、手を翳して訪客を麾きつゝあ

り、枝垂櫻の濃艶なる、祇園の美人と共に、來つて臙夜に見るべし、境内に鑛泉あり、祇園新地を畔下に集めて半日の興遊を試みるも亦たオツならずとせず、附近には桓武天皇御草創の長樂寺あり、頼山陽の墓あり、西行庵あり、芭蕉堂あり、又將軍塚は東山、華頂山の巔にあつて山城半國を眼下に望むべく、眺望最も雄偉也、塚は延暦奠都の際、八尺の土偶に着せるに甲冑を以てし、之に弓箭を持たしめて埋めたるもの、天下大に亂れんとする時は、先づ此の塚鳴動すと傳ふ。

公園の西に、祇園會を以て有名なる八阪神社あり、素盞鳴尊、稻田姫外に尊の五男三女を八座に祀れる也、次に臨濟宗の本山建仁寺を訪はんか、茲に安國寺惠瓊の首塚あり、惠瓊長老、石田三成と俱に事を謀り、敗れて三條河原に鼻首せられたる後首を收めて葬りたる所なり。

公園の南端に接する所には、豊公の未亡人北政所、太閤薨去と共に、之

が冥福を禱らん爲め落飾して入寺したる高臺院あり、又産寧阪を上つて東すれば彼の清水寺のあるあり、一名音羽山と云ひ、崖に臨んで有名の舞臺あり、音羽瀧あり、西方の崖は南園と稱して新高雄と名のあるその如く、晚秋紅葉の風情最も賞すべし、境内には僧月照、信海等の墓あつて勤王の志士を偲ばしむ。

清水の舞臺下を東に山間に進み入れば、六條、高倉二帝の御陵地なる清閑寺に至るべし、高倉院の籠姫小督局の隠棲せしは即ち當寺にして、林間の松風、今尙は彈琴の餘韻を傳ふ、世に此附近を歌の中山と稱して、風景亦た掬すべきものあり。

清水寺を西南に下つて、西大谷に至る道を鳥邊山、又は鳥部野と稱す、古來幾多の幽魂は此處に一片の煙と消え去りし所なり、之より西大谷に至れば、西本願寺の廟所は、じめ夥多の古蹟に乏しからず、それより西



南に進めば、秀吉の創建せし方廣寺あり、結構の雄大なる道がに豊公の  
 膽氣を窺ふべきものありしが、慶長七年の火災にて焼亡し、同十五年右  
 大臣秀頼之を再建して、國家安康の銘ある巨鐘と共に、天下の物議を惹  
 起したるは、世人の知る所なり、依て當時を惟ふに、家康が國家安康の鐘  
 の銘を以て、自己を呪ふの意に出でたるものとして、抗議を申込みたる  
 は、ヨク／＼窮餘の口實に過ぎず、畢竟は大阪方に喧嘩を買はせて、再び  
 起つ能はざらしめんとの策を描きたるものならんが、それにしては甚  
 だケチ／＼した口實を設けしもの哉と、家康の爲に聊か嗤笑せざるを  
 得ず、之が秀吉なりしならば、憊る小刀細工的の抗議は申込まず、更に正  
 々堂々の陣を張つて、宣戰を布告すべかりし也、這個が即ち秀吉と家康  
 との人物の大小が岐るゝ所以に外ならず、今紀念の巨鐘は存すと雖も、  
 春の朝、秋の夕、永く當年の哀響を忘れざらしむ。

方廣寺大佛殿の南に隣するは、豊國神社也、社の背後なる東山の峯嶺  
 には、豊公埋骨の地なる阿彌陀ヶ峯あり、慶長三年八月十八日、稀世の英  
 雄太閤入滅す、秘して喪を發せず、増田右衛門尉長盛、獨り徒歩して柩を  
 護り、密に此の山麓に英骨を埋む、憶ふて、當時に、潮れば、亦哀弔の涙なき  
 能はず。

豊國神社の南には、棟木の由來の淨瑠璃にて有名なる三十三間堂の  
 蓮華王院あり、此邊一帶の地は、元平家六波羅の館の在りし所に、清盛  
 入道が豪奢を極めたるの地も、權花一朝の夢と洗ひ去られて、今は之を  
 偲ぶだに由なし、蓮華王院の東南なる泉涌寺は、歴代の帝皇后妃の尊牌  
 所として顯はる、背後の山は、御陵の靈地にして、閑雅清寂、一點の紅塵を  
 交へざる、別天地なり、那須與市の塔に、次いで、夢の浮橋あり、源氏物語に  
 よつて、世に聞えたる名橋とす。

之より間道を経て東福寺に到るべし、奈良東大興福の二寺に擬して東福寺と名けし名刹にて、境内に偃月橋あり、十三重の石塔あり、皇帝親王の御陵あり、勤王志士の招魂碑あり、更に溪流に架する長廊を渡れば、觀楓の勝景、宛として錦繪に對するが如きあり、その他古今の名士英傑に由緒ある古蹟、十指にして數へ難し。

之より方向を轉じて、三條通り跡上以東山科街道を一括して案内せん、山科に入れば花山元慶寺に僧正遍照の墓あり、更に天智天皇の御陵に次いで大石稻荷あり、大谷派別院には蓮如上人、證如、實如上人等の墓所あり、その他布引瀧、仙人洞、阪上田村磨の古蹟、大石良雄の古蹟等名所多々あり、それより醍醐村に至れば下醍醐寺の五重塔を見るべく、太閤花見の舊趾なる花見山を觀るべし、醍醐天皇の御陵は清瀧神社參拜と共に詣つべく、更に進んで城江の境に入れば、日野薬師より、鴨長明の舊

址に達すべし、此方面に於ける探勝の地は未だ盡きざれど、其贅を割愛して一先づ市内に踵を廻らし、而して西北部の史と詩とを兼ねるの地に臻らん。

### ◎嵯峨嵐山方面

紫野大徳寺 秀吉の示威的舞臺 英雄豪傑の夢のあと 紅葉の三尾 洛外の神境 小督の遺蹟 嵐山の仙境 寸地これ歴史

洛の西北部一帯の地を俗に西陣と總稱す、蓋し應仁の亂に西軍の陣したるより名けたりと傳ふ、西北に行く途に、紫式部の塔を閻魔堂に訪ふて、紫野に至れば、先づ大徳寺の巨刹あるを見ん、舟岡神社の丘上には織田信長、信忠を祀るの外、織田の功臣三十六名の額を掲ぐ、淳和天皇離宮の址は又此附近にあり、大徳寺は龍寶山と號して大燈國師の開基に

係る、境内幽寂、神氣の雋永なるものあつて、漫るに秀吉が柴田に對する示威的燒香の如何に大袈裟なりしかを偲ばしむ、彼の千利休の傳説にて有名なる山門の依然として三百餘年の昔を語るあり、題して金毛閣と謂ふ、此一廓に於ける歴史的紀念物を舉ぐれば、太閤の母大政所の塔、千利休の墓、一休禪師の庵址、前田利長母子の塔、蒲生氏郷、小早川隆景、細川忠興、片桐且元、豊臣秀吉、紫式部、其他戰國時代の英雄才女等を想起せしむべき墓碑、十指にして足らざる也。

之より些々たる遊覽所を抜きにして、北野神社より衣笠村なる金閣寺に至るべし、足利將軍義滿が其全盛期の費を盡して建立せし伽藍なれば、眞に其名の金閣寺たるに愧ぢざるの結構にて、座るに室町時代の榮華を偲ばしむ、又同所の等持院には、足利尊氏の木像をはじめ、歴代の碑墓あり、維新前勤王の志士が、尊氏の木像を敲つて、徳川幕府に對する

示威運動をせしは此寺也。

更に御室なる仁和寺を訪はんか、光孝天皇の御願にて、宇多天皇の御遺志を紹がせ給ひ、天位を遜れて當寺に落飾の御事ありしは、今尙ほ庶民の義憤を禁ずる能はざる所也、宇多天皇の御陵は御室の老櫻と共に茲に在つて、千古香しきものあるも畏こし、これより御室川を渡れば、一に高尾と稱する高尾、楨尾、梅尾の三尾なる紅葉の名所あり、晩秋の頃、清瀧川の奔流、白霧を漲らすの所、山を彩るに紅黄を以てし、溪を飾るに錦繡を以てす、其風趣の奇異なる、其山水の秀麗なる、歌心なき野暮天と雖も、一たび這の仙境を探らば、思はず「何等の奇趣ぞ」と絶叫せざる能はざる可し、而して高尾には和氣清麿の神護寺あり、梅の尾には一世の名僧明慧上人の古蹟あり、西山の腹腰に架するに白雲橋を以てす、雲に入り、天に上るの想ひあらしむ、此處より踵を返して南花園村に立戻れ

ば、粹法師兼好及び琵琶歌にて有名なる『雙ヶ岡の秋の月』なる古蹟を見るを得べし。

花園村より嵯峨の名所を探るべく、道に花園天皇の御址武田信玄勝頼父子の石塔、織田信長父子の石塔、光秀の明智風呂、其他石田三成、春日局、佐久間象山諸名士の墳墓に詣するも亦懐古の資ならん乎。

嵯峨は名稱上下の二に別たる、京洛附近、歴史を詩的に説明する唯一の古蹟に屬す、蓋し嵯峨その物の名、既に詩趣を帯ぶ、茲に月あり、花あり、瀧あり、秋草あり、草庵あり、以て四邊を詩化せしむ、實際は想外にツマラなき所とするも、往いて史を偲ぶべく過剰の價あり。

先づ廣澤大澤の池畔より探らんに、明鏡を湛えたるが如き水中に天神島、菊ヶ島の二島ありて、巨勢金岡が排置せし庭湖石あり、『瀧の音は絶えて久しくなりぬれど、名こそ流れて尙ほ聞えけれ』との古歌の跡

は大澤の池畔にありて、舊嵯峨御所も亦此處より遠からず、これより中院の西に至れば、彼の平相國清盛の嬖妾祇王、祇女の遁世したる祇王寺のある在つて、當年を偲はしむ、平家物語は之を美化し、詩化して、以て薄命の佳人を悼みぬ、『娑婆の榮華は夢の夢、樂み榮えて何かせん、年の若きを頼むべきにあらす、蜻蛉稻妻よりも猶ほかなし、一旦の榮花に誇りて、後世を知らざらんこと、悲しさに、今朝まぎれ出で、慙くなりてこそ参りたれ』と佛御前、かつきたる衣を打脱げば、無慘や一世の美人は、厄になりてぞ居たりける、此のさまを見たる祇王は涙を抑へつ、『愛き世の中のさがなれば、身の愛きとこそ思ひしに、恁様にさまを變へておはしつる上は、日頃の咎は露塵程も残らず、今は往生疑ひなし、妾が厄にならしをだに世にわがたきことの様に、人も言ひ我身も思ひ候ひしぞや、それは世を怨み身を嘆きたれば、様を變ふるも理なり、わがせは怨

も。なく。嘆。も。なし。今年。は。僅。に。十七。になり。し。人の。それ。程。まで。穢。土。を。厭。ひ。  
 淨。土。を。願。は。んと。深く。思。ひ。入り。給。ふ。こそ。誠。の。大道。心。とは。覺。え。候。ひ。しか。  
 嬉。し。かり。ける。善。智。識。か。な。」と。昨。の。戀。仇。と。俱。に。手。を取。つ。て。諸。業。の。無。情。  
 を。觀。せ。し。め。たる。古。蹟。は。今。尚。ほ。兩。女。の。幽。魂。を。髣。髴。せ。し。む。祇。王。寺。の。南。栖。  
 霞。寺。に。至。れば。門。前。に。歌。石。あり。これ。瀧。口。入。道。と。横。笛。と。の。古。蹟。也。瀧。口。時。  
 頼。建。禮。門。院。の。侍。女。横。笛。と。比。翼。を。約。す。偶。々。時。頼。其。父。の。懲。戒。する。所。とな。  
 り。此。寺。に。入。つ。て。髪。を。削。る。時。に。年。十八。横。笛。之。を。聞。いて。悲哀。に。堪。へ。ず。慕。  
 ふ。て。茲。に。逢。ふ。瀬。を。求。め。しが。時。頼。應。せ。ず。人。を。して。諭。し。歸。らし。む。恁。く。て。  
 横。笛。も。亦。一。念。發。起。して。此。石。上。に。踞。し。『山。深。み。思。ひ。入り。ぬ。る。柴。の。戸。の。  
 眞。の。道。に。我。を。導。け』と。の。一。首。の。歌。を。名。殘。に。可。惜。青春。の。血。を。その。黒。髮。  
 と。共に。斷。ち。棄。て。たる。ぞ。哀。れ。なる。

更に歩を轉じて大堰川の北岸を溯れば、小督塚あり、仲國の塚あり、高

倉院の宮女小督、一夜内裏を遁れて嵯峨野の奥に庵を結びして、ふ其所  
 在地は、今明かならざれど、平家物語の作者は、能く小督を詩化し、仲國を  
 美化して一篇の悲劇を後世に傳へき、『仲國寮の御馬たまはりて、明月  
 に鞭を揚げ、西をさして、ぞ歩ませける、小鹿鳴く、此山里と詠じけん、嵯峨  
 のあたり、秋の頃、さこそ哀れにも覺えけぬ、中略、龜山のあたり、松のあ  
 る方に、幽に琴ぞ聞えける、峰の嵐か、松風か、尋ぬる人の、琴の音か、控へて  
 之を聞きければ、少しも混ぶべくもなく、小督の殿の爪音なり、樂は何ぞ  
 と聞きければ、夫を想ひて戀ふと讀む、想夫戀といふ樂なりけり』との  
 名文は、能く此の詩境を説明して、剩りあるべし。

元來嵯峨野とは、龜山より小倉山の麓の總稱にして、茲に散在する名  
 所古蹟を一括すれば、前述の外、新田義貞の首塚、勾當内侍隱栖の古蹟、嵯  
 峨土御門、後嵯峨三帝の塔、法然上人の廟、定家、去來の遺趾、天龍寺、其他世

知られたる名所を以て充さる。

秋草の嵯峨野詩的の嵯峨野と聯關して最も好き對照は、大堰川の清流を隔つる花の嵐山也、櫻花の精を聚めたと、四季それの絶景とは世既に定評あり、之が美を絮説するは尙ほ砂糖の味を甘しと形容するが如し、渡月橋を渡れば、大谷派本願寺の別莊對嵐房あり、清流に棹さして溯れば、戸難瀬瀧、千鳥淵などありて、巨巖奇石水面に聳立し、水青く、澄やかに、山色倒さに影を浸すの、ところ、鱗魚、激湍として、躍るを見るべく、實に、畫中の仙境に屬す、而して山下の温泉に到れば、浴して一日の勞を醫すべく、滾々たる熱泉あり、此所に鮮魚を味ふ、蓋し畫中の行樂なり。『花の山二丁上れば大悲閣』との芭蕉の句碑は、山頂の大悲閣に到らんとする乘として路の邊にあり、大悲閣には彼の保津川の急流を開鑿せし水利家、角倉了意の像を安置す、それより下山し、更に上流に船を雇ふ

て保津川を下らん乎。

山と山との間崖壁相迫り、怪石送り奇巖迎ふるの間、急流矢の如く眼も眩めくばかりなるも、舟夫の巧妙なる棹はよく危險を思はしめず、千差萬別の奇景を賞しつゝ、奔下なし得る也、新緑の頃、試みに舟して此河を下らんか、兩岸の躑躅、紅白に咲亂れて碧水を彩る、實に天下の美觀たるを失はず、川の下流、清瀧川に合し、大堰川となりて嵐山の麓に出で、更に桂川となりて南流す、此附近一帶、史蹟として、名所として、兩つながら其實を完ふせる勝地たるは言ふまでもなし。

◎山崎附近及兩本願寺

秀吉登壇の臨臺たる山崎合戦——秀吉漸く假面を脱す——聚樂の館と兩本願寺

更に踵を西南に廻らして點檢し來れば、九條四塚通りには眞言宗の總本寺たる教王護國寺あり、此の巨刹東西の兩寺に別たれ、世に知られし東寺の塔は五重にして高さ三十六間、仰ぎ見るに足る、これより洛外向日町に至つて西行庵を訪ひ、次に山崎に入りて明智光秀の籠りたる正龍寺の城趾を見るべし。

明智對秀吉の山崎の一戦は、事その物は左まで大ならずとするも、秀吉が出世の初舞臺とも謂ふべき功名場として記憶すべき史蹟に屬す、茲に少しく所懐を陳ん乎。

山崎の一戦は、秀吉をして羽柴筑前守より豊太閤に昇進せしむべき好個の登龍門なりき、若し此の試験に落弟すれば、秀吉は光秀と其位地を顛倒し、家康をして今少しく早く天下を統一せしめたるやも圖られざりし也、故に此の一役は、其性質極めて重く、其責任甚だ大にして、影響

する所の範圍亦頗る廣しと雖も、戦争としては最も勝負の早き單純なる事實に過ぎざりし也。

扱て之が戦況を語らんに、天正十年六月十三日、秀吉は深夜より兵を進め、中村孫平次、堀尾茂助を先手の鐵砲頭として、山崎の上なる松山に控へしめ、中川瀬兵衛、高山右近其他二三の大小名を秀吉が旗本の前に立たせ、養子信勝、弟秀長をも皆な先手として、堀秀政を其總指揮官に任じ、蜂須賀正勝、黒田孝高の謀將を左右に率ひ、一舉にして敵を突破らんと、ヒタ進みに陣を進めたり。

光秀も亦その本營たる正龍寺の城を出で、山崎の東、宿の頭に兵を進めたるが、光秀始めて山崎の上なる松山に心附き、急に鐵砲大將松田太郎左衛門を之に登らせたり、待設けたる秀吉方の鐵砲大將は、暫く鳴を鎮めて敵を引寄せ置き、中村孫平次先づ五匁筒を抱えて、敵の真中を

目掛け一發の砲烟を相圖に切つて放つや、全軍ドツと轟めいて、矢先下りに打出す響き、實に百雷の落下するよりも凄し、明智方の鐵砲組は不意を喫つて一支へもなく將恭倒しに薙倒され、足並亂して上下に敗走する所を、時分はよしと、秀吉の先手が猛烈なる突貫を行ひたれば、明智の先手、總崩れに崩れたり。

光秀此の能を見るや、遂に旗本勢を進めて先手の崩れを喰止め、正龍寺手前にて必死の惡戦を試み、茲にて兩軍入亂れ、決戦幾十合、明智方の名ある武士、討死するもの算し難し、光秀若し敗走せば、天地身を容るべきの地なし、何れも死ね〜と叱罵し、秀吉方も亦主君の弔ひ合戦に敗れなば、争でか生残るべき面目やあるべきぞと、大將をばじめ頻りに討死々々と叫びつゝ、戦ふ身は綿となり、刀はさゝらとなるも、退くなくと叫び合ひ、火花を散らして切結ふ、血は流れて河をなし、屍は積んで山

を爲す、加之、六月中旬の炎天に、重き鎧をかついで戦ふことなれば、修羅道の痛みに、焦熱地獄の苦みを加へて、此の半時ばかりの合戦の如何に悲惨を極ためるか、實に甲越川中島以後の劇戦と聞えたり、而して兩軍の兵數は、正確に知る能はざれど、光秀の兵は約二萬、秀吉軍は數に於て稍や優りたるが如し。

松山を先奪せし事以外に、軍略に於ては敢て妙なる驅引の見るべからざる、比較的單純にして激烈なる山崎合戦は、恁の如くして局を終り、勝利の名譽と利益とは、全然秀吉の手に歸したりき、天下を取るの踏臺として、此一戰、寧ろ安値に過ぎたるの觀あり、勿論山崎合戦の勝利は、直ちに秀吉をして、天下を取らしめたるにあらずと雖も、天下を取るべき機運に乗せしめたるには相違なし、其結果として、秀吉が胸中に蓄積せる大志の一段切實となりたる徴は、密に大阪の城番に對つて、其城何



方へも渡すべからず。上様御跡を繼ぐべき天下人へ目出度相渡すべき爲なれば、それまでは嚴重に城を守るべしと申合めたるに見るも明か也。

山崎は秀吉光秀の對戦以外、元治年間、真木和泉以下四十七士の義兵を擧げし跡を存し、其他幾多の古蹟少なからざれど、略して八幡町に至るべし、此處には男山八幡宮あり。史蹟以外、風景の稱すべきもの少なからず、更に八幡より東北に歸れば淀の町あり、淀の川瀬の水車と謂ふは秀吉、淀の河水を大阪城に引きたるより起ると傳ふ、而して淀城趾は豊臣衰亡中の大立物たる淀君の住みたるより名高し。

淀川を渡つて上鳥羽に至れば、寶相寺あり、文覺上人が袈裟の爲に築きしと謂ふ鳥羽の懸塚あり、鳥羽の離宮は字竹の山に存するも、今は荒廢して唯だ其名を留むるのみ、此附近にて二三の御陵に詣で、是より再

び京都に踵を返して中央部の要地を訪ふべし。

名所として史蹟としての京都の見ごたへある點に於て日本一なる事は、前に述べたるが如し、然りと雖も旅する者は、京都にのみ戀々たる能はず、去つて他を訪わざるべからず、依て是より市内の主なる所を案内記的に擧げて其煩を避けん。

豊公が一代の精と華とを聚めて、棹尾の贅を盡したる聚樂の第趾は一條の南下立賣の北、大宮の西、千本の東にあるの地なれど、今は當年の面影を偲ぶべきものなし、本派本能寺は堀河通花町に在りて、俗に西本願寺といふ、全國幾十萬の善男善女が渴仰の本尊は收めて茲に在り、文永九年、親鸞上人の女、覺信尼始めて勅許を得て、上人の廟舎を今の智恵院境内に營みしが、以來屢々戦亂に會し、大津、山科、大阪、紀州、泉州等に移轉しつゝ、武人と拮抗して佛徒の實力の甚大なるを示したりき、而して

天正年間、信長の爲に大阪の本城を逐はれて、京都の伽藍を移し、基礎を茲に定めたるは第十一世顯如上人の時代なりし也。

西本願寺より岐れて、更に本家以上の勢力を蓄積すると共に、日本一の信徒を有するに至りしは、烏丸通りなる大谷派東本願寺也。慶長七年顯如上入の子教如上人、台命によりて新に佛閣を營み、之を東本願寺と號す。蓋し徳川家康夙に百萬の信者を有する佛徒の勢力の怖るべきを知り、秀吉の歿後、天下を掌握せんとするに當つて、本願寺の勢力を二分せんが爲に、特に大谷派なるものを建つるに盡力せしものならん乎。

東西兩本願寺を説き終るも、尙ほ京都の名所は擧げて算し難し、然れども之にて割愛し、去つて奈良方面に向はん。

◎伏見より奈良方面

秀吉が晩年の舞臺たる伏見——豊公偉業の夢の跡——京都以上の奈良——  
佛殿の阿修羅地獄——古美術を焼かれたるは千古の恨事

京都より奈良に到るの中間には見るべき史蹟尠なからざる中に、吾人は我國有史以來の大英雄豐臣秀吉が終焉の地として、將又晩年の劃策を描きたるの地として、伏見を検するの甚だ興趣多きを惟ふ。

今の伏見は、山城に於て京都に亞ぐの都會なれど、秀吉以前の伏見は、茫々たる荒原の中に二三の村落を見るのみにて、古歌に伏見野と詠せられし地にてありき。其後秀吉、茲に地を相して築城し、特に伏見奉行等を置きたるより漸次一の市街を成すに至りしものにて、今日の繁榮あるは、即ち秀吉の力に外ならざるを記憶せざる可からず。

伏見城址は町の東方伏見山に在り、元と水淵大和守なる戰國時代の小大名、茲に居を構へけるが、开は\*ンの玩具函的の小城に過ぎざりき。

文祿三年、豊臣秀吉更に佐久間河内守、瀧川豊前守を監督として堅大の城に改造し、之と連絡して、北の方桃山に殿舎を設け、之を桃山御殿と稱す。城は、慶長五年、石田三成の亂に際し、鳥居元忠、孤軍之を死守しけるが、浮田、小早川、島津の大軍に包圍されたる後、陥落するに至る。其後廢墟に歸して、今は唯だ城山の名を留むるのみ。

歩して城址の北に到れば、暫時恍然として去る能はざらしむる桃山御殿の舊墟なり、「追憶す豊公功業の大なるを、黄金を瓦と爲す亦奢に非ず」と後世の詩人をして嘆美せしめたる其の夢の跡や奈何、今その雄大華麗なる御殿の面影を偲ふに由なしと雖も、桃山の名に負ふ桃花に梅を加へて、滿山に紅を飾る、此間を逍遙して、此桃此梅の盛時を憶ひ、更に進んで、彼の豊國神社の畔に残る桃山の城門、桃山血天井と稱せられて豊公墳墓の下に保存せらるゝ殿舎の一部等を、想像の輸送力を以

て此處に移蒐し、是等の建築物を五十にし、百にして山谷の間に點布せしめ、部に眼を閉ぢて、念ひを當年に逆驅せんか、太閤全盛期の光景は宛として、腦裡に髣髴し來る也、人も物も、世も、景も、桃山時代ほど吾等をして憧憬の念に禁へざらしむるは、あらず、而して此地より桃と梅との風景を抜きにするも、尙ほ一遊の價十二分なり、南端なる『宇治見臺』より眺望すれば、蓮と菖蒲とを以て有名なる巨椋の大池は、四里十一丁の周圍を以て眼下に横はり、淀の長流は、蜿蜒として脚底を繞る、二條の白蛇、一は蟠りて眠り、一は怒つて奔るにも似たらん乎

伏見より、月に名高き觀月橋を渡つて南すれば、日本一の茶所、宇治に至るべし、古戰場としての宇治川は、幾多の詩と傳説とを遺しぬ、彼の橋、小島崎は橋の川下に在りて、佐々木、梶原の先陣を争ひし所を以て顯はる、橋姫の祠は宇治橋の西にあり、平等院はその南に在つて、源三位頼政

の最後を懐はしむ、加之、其殿堂には日本美術の誇りとして、外國博覽會にまで模型を出陳したる鳳凰堂のあるあり、銅製雌雄の鳳凰、魂あつて天界に飛翔せんとするの風致、古人が苦心の藝術のあと、就て見るべき也。

之より木津川の沿岸に、幾多の諸史蹟を辿り、更に南して舊都奈良に入らん乎。

名所史蹟の上より見て、京都を山城の親玉とせば、奈良は大和の親玉以上、更に語るべく多くの資料を蔵する古都に屬す、藤原氏以降の舊都は寺院の奈良なり、僧徒跋扈の奈良也、修羅場の奈良也、而して今は大佛殿と藝術品と風景との奈良也、春は淺茅ヶ原の梅、猿澤池畔の櫻、春日神苑の鹿に藤、夏は興福寺公園の納涼、秋は三笠山の觀月、手向山の紅葉、冬は青丹によし、霞酒、四季それらの眺めと名所だけにても既に千金の

價あり、況んや東大寺、興福寺の如き巨刹あつて、千年の昔を懐はしむ、大佛殿の鍾聲と共に、永く餘韻を味ふべきの地也。

日本の寺院として、最も光彩ある歴史を有するは奈良興福、東大の二寺なりとす、東大寺は聖武天皇の神龜五年、帝の勅願によつて草創せられたる巨刹にして、八宗兼學の開祖なり、彼の十六丈に餘る盧舍那佛の舍殿は、此處に雲表を衝いて鎮座す、而して這の巨漢大佛殿は、行基僧正の鑄造以來、前後數回の猛火に包まれて、或時は頭部を熱溶せられ、或時は肩を殺がれ、又或時は鼻、首等を焼燹せられて、慘憺たる虐待を受けられたり、其最も慘狀を極たるは、平清盛の治承四年、淨海入道の逆鱗に觸て、興福寺、般若寺等の炎上と共に、火焰を浴びたりし時也、平家物語はよく放火當時の慘狀を髣髴せしめたり、『頃』は十二月二十八日の夜、折柄の風烈しく、炎は一つもなかりけれども、吹き迷ふ風に多くの伽藍に吹

懸けたり、凡て耻をも思ひ、名をも惜む程の者は、奈良阪にて討死し、般若  
 寺にて討れにけり』而して歩行の叶はざる老幼男女病人、老僧女の童  
 等は、大佛殿の二階に避難せしが、『大佛殿の二階の上には、千餘人上り  
 わがり、敵の積くを上せじとて、階を引きてけり、をめき叫ぶ聲、焦熱、大焦  
 熱、無間、阿鼻、焔の底の罪人も、是には、すきじとぞ見えし』平軍が僧徒を  
 塵殺せんとして、放ちし猛火は、大伽藍を烏有に歸せしめ、更に大佛殿を犯  
 しぬ、『金銅十六丈の盧遮那佛、烏瑟高く露はれて、半天の雲に隠れ、白毫  
 新に拜まれさせ給へる、満月の尊容も、御首は、焼け落ちて、大地にあり、御  
 身は、鎔きわひて山の如し、八萬四千の相好は、秋の月早く、五重の雲に隠  
 れ、四十一地の璣珞は、夜の星空しう、十惡の風に、漂ひ、烟は、中天に、満ち、満  
 ちて、焔は、虚空に、隙もなし、まのあたり見奉る者は、更に眼をあてず、幽に  
 傳へ聞く人は、肝鬼を失へり』との物凄き名文を拈出するに至らしむ、

之を治承四年の亂となす、其後此の名利は幾度か兵燹の亂に遭ひ、佛菩  
 薩の像亦た幾度か佛師職人の厄介となつて、伽藍と俱に完全の復舊を  
 告げたるは、徳川氏の元祿時代にてありき、而して古器珍寶の多き、美術  
 上の好資料を藏する、天下恐らく當寺に比すべき史蹟は、あらざるべし、  
 故に藝術に志すの士は、奈良に來つて、先づ古什器の美に、矚目せざるは  
 なからん。

次に興福寺は法相宗の本山にて、久しく春日神社を保管しける故を  
 以て、一に春日寺とも謂ふ、往古は堂宇境内に満ち、壯麗天下に冠たるの  
 稱ありしが、元慶二年以來、兵火に罹ること八回、漸く復舊して、今僅に殘  
 留する所の堂宇は、南圓堂、北圓堂、東金堂、五重塔の數者に過ぎず、此中南  
 圓堂の建築は、最も美術の精を凝したるものにて、猿澤池畔に臨める十  
 五丈六尺の五重塔と共に、奈良市街を飾るの双美たり。

前後八回の炎上中、其最も酸鼻を極めしは即ち東大寺その他と同時に大火焔を浴びたる治承四年の亂なりき、「興福寺は淡海公の御願藤氏累代の寺なり、東金堂におはします佛法最初の釋迦の像、西金堂におはします自然湧出の觀世音瑠璃を並べし四面樓、朱丹を交へし二階の櫻、九輪空に輝きし二基の塔、忽に煙となるこそ悲しけれ(中略)法相擁護の春日大明神如何なる事をか思しけん、されば春日野の露も色かはり、三笠山の嵐の音も恨むるやうにぞ聞えける、焔の中に焼け死ぬる人數をかぞへたれば、大佛殿の二階の上には一千七百餘人、山階寺には八百餘人、或御堂には五百餘人、或御堂には三百餘人、具さに記したりければ、三千五百餘人なり」とあるに就て見るも如何に當時の奈良が修羅場化されたるかを想見するに足るべし、此亂に於て、平相國が幾千無辜の民を屠りたるの罪は素より淺からず、伽藍を焚き、佛を毀ちたる、又甚

な惜むべし、而してそれ以上吾人が最も遺憾に耐へざるは、此兵燹の爲に今尙ほ世界に誇るべき日本の古美術が焼失したるの一事也、セルクスピアの文學を有するが英人の誇りとすれば、奈良の古美術を有するは日本人の誇り也、而もその大部分が兵火の亂に破壊されたるを思へば、吾人は人命の犠牲以上更に美術の滅盡を哀惜せざるを得ず、如上の二大伽藍を訪問したれば、「猿澤の池もつらしなわきも子が玉もかつかは水もひまなし」と貫之が詠じけん猿澤の池を訪ひ給へ、それより西行法師の「三笠山春を音にて知られけり氷をたたく鶯の瀧」と詠せし三笠山より鶯の瀧の附近を逍遙して、歸途奈良博物館に古美術を鑑賞し、更に春日神社に詣で、可憐の鹿に戯れつゝ歩行の勞を慰するも可ならん、而して吾人は一足お先に笠置、吉野方面に驅つて諸君を待たん。

◎笠置及吉野附近

笠置の沿革——後醍醐帝の御涙——古美術の法隆寺——日本民族の誇り——  
 吉野の山の懐古——悲劇の跡——血闘男兒村上義光——小楠公の遺跡

五畿内の中、大和は最も複雑なる史蹟を有する所なることは世人の知るが如し、依て予は先づ吉野を中心として、鐵道の順路に應じて大和めぐりを開始せんとす、奈良を見たる足序なれば、笠置山より探り行かん乎。

千餘年前、天武天皇御獵を好ませられ、或時笠置山へ御幸し給ひける折節、牛かと擬ふばかりの大鹿躍り出で、帝を追ひ參らせ、いとも危く見えしかば、帝は一心に天に向つて祈誓を凝し給ひしに、帝は危き難を免れ給ひしにぞ、其報恩として一の伽藍を建てんと思召し、御笠を後の

目標に置かせられし因縁によつて、茲に建立せる寺を笠置寺と命名されけると傳ふ。

元弘の昔、後醍醐帝が花の都の御座所さへ、春の嵐の荒ければ、月を辿りて内裏を通れ出でさせられ、さして行く笠置の山に、至尊の身を忍ばせられき、而も執拗無道の北條高時は、此處にまで軍勢を寄せたり、されば昨日まで清浄無垢の七堂伽藍に、松風の音、讀經の聲のみなりし山澤も、忽ち修羅の巷と化して、矢叫びの音凄まじく、遂には城も陥りける、帝は侍臣藤房卿と共に、又も此山を落ちさせられ、唯ある松原にかゝり給ひし時、東方はのどと白みて、夜は明けたり、帝は松の木蔭に暫しと御足を停められ、「さして行く笠置の山を出でしより、天が下には隠れ家もなし」と御詠あるに、藤房涙とゆめ敢す、「いかにせんたのむ蔭とて立寄れば、なほ袖ぬらす松の下蔭」と應へ參らせしとの一事は、後世修

身書等に傳ふるが如し。

笠置寺畔、小丘の上に一宇の毘沙門天祠あり、これ楠公の守本尊を祀れる也、後醍醐帝の夢に、楠子あるを知り給ひしも、此處なりとか、行宮の址は、草離々として一石の止むるものなしと雖も、面積は三百餘歩、山の最高所に在り、元弘の當時如何なる宮居なりけんかを惟ふに、御簾秋風に搖いで寒蛸破壁に啼くの外、皇天皇土、帝を守護し奉る武士なく、夜雨肅々として御消魂の種のみ繁く、御寂寥の感、拜察奉るだに畏し、而して天を摩する彌勒岩の根に一基の卒塔婆建てり、茲に元弘戦死の忠魂を用ふ、それより迂曲せる徑を辿り行きて吹貝岩に登るべし、高さ十六尺斜に西に聳えて廣さ三十六尺、嘗て北條勢に攻め圍まれし時、帝の軍兵この岩上に立つて陣螺を吹き、味方を指揮せし所なるよし、岩上より四顧すれば、連山屏風の如く、時つが中を、木津川の清流麓を縫ふて、白く、眞

帆片帆の遠く、鷗の遊ぶがやうなるは、淀に通ふの船にやあらん、春は數株の老櫻、早く咲いて早く散り、其散り際の脆き形は、眼前に沙羅双樹の理を暗示さるゝが如し。

笠置より數里の地に、梅に名高き月ヶ瀬のある在りと雖も、史に關係なき名所なるを以て略し、更に奈良に立歸つて、大和の名所を探るべく、先づ法隆寺驛に下車せんか。

法隆寺は日本最古の建築にして、南都七大寺中最も著はる、舊名を斑鳩寺と稱し、推古天皇の旨を奉じて聖德太子、之が建立に着手せられ、前後十五年の歲月を費して竣工せる大伽藍也、その配置は金堂、五重塔を以て主眼となし、大講堂を後頂に、鐘樓、鼓樓を兩耳とし、中樓門を鼻位に、南大門を口にして、周圍に廻廊を廻らし、以て人面を形成す、故に之を佛面伽藍と稱し、結構の精緻、規模の宏壯、古印度美術の粹を抜いて粗を棄



て。た。る。も。の。と。言。ふ。も。決。し。て。誇。張。の。贊。辭。に。あ。ら。ず。隨。つ。て。外。來。の。歐。米。美。術。家。が。見。て。以。て。驚。嘆。し。日。本。の。如。き。島。國。に。憊。る。木。造。の。精。巧。な。る。建。築。上。の。大。天。才。あ。ら。ん。と。は。夢。に。も。思。ひ。懸。け。ざ。り。し。所。な。り。と。評。せ。し。と。云。ふ。も。亦。宜。な。り。加。之。内。外。國。の。佛。像。珍。寶。奇。品。伽。藍。内。に。充。滿。し。一。と。し。て。平。凡。な。る。物。の。あ。る。無。し。歴。史。家。美。術。家。が。此。處。に。來。つ。て。專。念。に。研。究。す。る。も。尙。ほ。一。二。年。に。し。て。參。考。材。料。の。盡。く。る。な。し。と。謂。ふ。法。隆。寺。を。有。す。る。こ。れ。奈。良。の。誇。り。に。あ。ら。ず。大。和。の。誇。り。に。あ。ら。ず。世。界。に。對。す。る。日。本。民。族。の。誇。り。な。り。と。す。

之より吉野に至るまでの間には、紅葉に名ある龍田川あり、松永久秀が織田信長に亡ぼされし信貴山觀喜院の古城趾あり、畝傍山及楯原の古都址あり、神武天皇の御陵所あり、櫻の名所初瀬あり、葛城山あり、其他語る可きもの多々あれど、兎に角吉野に入つて日本の歴史に大關係ありとす。

る南朝の古蹟を偲び、更に花の名所としての吉野山を中心として其附近を探るべし。

吉野山は一に櫻花の天下に冠たるの名のみを以て屑しとするものにあらず、南朝三代五十餘年の悲惨なる歴史が、よく道の花香、月影の間に織込まれたるを以て、吉野の價はいやが上にも其重量を増し來れる也。花ありて南朝の歴史に詩趣を加へ、南朝の遺蹟ありて花はいよゝゝ其芳香を高からしめ、人をして感慨に堪へざらしむるものあるは實に此の景と歴史との調律宜しきを得たるが故なり、名も床しき柳の渡しを渡りて一の阪を上れば、櫻花いよゝゝ密に、所謂長峰の櫻の邊に至れば、花影深く身を包んで陽春盛時の頃は、眼もあやに眩きが如し、茲に南朝の忠臣村上義光の碑あり、而して五百年の昔に溯れば、大塔宮の御悼しさに次いで義光等の最後の光景、宛として眼前に浮び來るを覺ゆ、

「大塔宮今は遁れぬ處なりと思召し、赤地の錦の鎧直垂に、緋威の鎧の  
 まだ巳の刻なるを、透間もなく召され、龍頭の冑の緒をしめ、三尺五寸の  
 小長刀を脇に挟み、劣らぬ兵二十餘人前後左右に立ち、敵の群がりて控  
 へたる中へ走りかゝり、東西をはらひ、南北に追ひ廻し、黒烟りを立て、切  
 りて廻らせ給ふに、寄手大勢なりと雖も、僅の小勢に切り立てられ、木の  
 葉の風に散るが如く、四方の谷へ颯と引く、敵引けば、宮は藏王堂の大庭  
 に並居させ玉ひて、大幕打ち揚げて、最後の御酒宴あり、宮の御鎧に立つ  
 矢七筋、御類さき二の腕二ヶ所突かれさせ給ひて、血の流るゝ事瀧の如  
 し」これ一場の悲劇にあらすや、太平記の作者、如何に芝居氣に富むと  
 雖も、全然根も無き事を、恠くも捏ち上ぐる程の大膽者にあらす、而して  
 大塔宮は立ちたる矢も、抜かず、血汐も洗はず、鮮血淋漓たる御腕に、大盃  
 を舉げて、主従死別の宴を張らせ給ふ、何ぞ其の御膽氣の雄々しくも亦

痛まじきかゝ、恠る所へ村上彦四郎義光、身に十六矢を負ひ、満身紅の血  
 を吹きつゝ、宮の御前に驅せ參じて、申進するに、疾くも此場を遁れさせ  
 給はん事を以てす。「恐れある事にて候へ共、召されて候錦の御鎧直垂  
 と御物具とを下し賜はりて、御諱の字を冒して、敵を欺き、御命に代り進  
 らせん。」と申したるが、宮は肯き給はず、死なば諸共にと仰せられける  
 を、義光稍や聲色を勵まして、「かゝる淺間しき御事や、候渡の高祖榮陽  
 に圍まれし時、紀信高祖の真似をして、楚を欺かんと乞ひしをば、高祖之  
 を許し給ひ候はずや、是程にいふかひなき御所存にて、天下の大事を思  
 召し立ちけることこそうたてければ、や其御物具を脱せ給ひ候」と勸  
 め奉りて、御物具より鎧直垂等、悉く宮の御裝束と我物とを脱ぎ替へて  
 後、宮を南の方へと落延びさせ參らし、さて義光は二の木戸の高櫓に驅  
 せ上つて、遙に宮を奉送し、御後影の遙に幽にならせ給ふ頃を見濟した

る止今はこれまでなりと櫓の板を切落とと共に身を高きに現はして大音聲に名乗るらく「天照太神御子孫神武天皇より九十五代の帝後醍醐天皇第二皇子一品兵部卿親王尊仁逆臣のため亡ぼされ恨を泉下に報せん爲に只今自害する有様見置きて汝等が武運忽に盡きて腹を切らんとする時の手本にせよ」と言ひさま鎧を脱いで櫓の下に蹴落し錦の鎧直垂の袴ばかりとなり白妙なす練絹の小袖の肌押脱ぐよと見れば清らなる胸に一閃の白刃迸る血烟と共に腸を抉出して櫓の板にたゞきつけ太刀をくはへて果てたりき其衷心の如何にかあはれ深く其最後の如何にか健氣なるよ恁くて村上義光の忠魂は錦の御旗と共に永く吉野をして詩的生命あらしめる所以也。

「花に寝てよしや吉野のよし水の枕の下に石はしる音」と後醍醐天皇の御製ありし所は満山の花を一時に收むべき吉水神社藏王堂の附

近なり茲に護良親王の賊軍を拒ぎ給ひける跡を偲ぶべく同時に君臣訣別の悲劇の一齣を想見するに足るべし其後豊臣秀吉が花を吉野に觀たりし時大觀櫻の本營を置きたるも亦藏王堂の境内なり如意輪寺は之より左折して七八丁の彼方如意輪山の半腹に在り古詩人をして「古陵松栢天懸に吼ゆ山寺に春を尋ねて春寂寥眉雪の老僧時に箒を輟む落花深き處に南朝を説く」と吟出せしめたるは藏王堂の事にて如意輪堂に到る途は櫻樹を以て隧道をなす。

楠正行が決死の首途を紀念すべく箭鏃を以て「かへらじと」の辭世を残したる其堂扉は今藏して寺の寶庫にあり而して小楠公の營塚は後醍醐帝の陵下にありて當年の英魂を招がしむそれより踵を來路に廻らして竹林院の泉林を見喜藏院櫻本坊等の名所を訪過すれば長くも天皇橋あり橋畔に立つて奥の千本を望めば春吉野に満ちて花か

雲かを疑はしむ橋を渡りて右すれば金峰神社、苔清水等を経て花樓の地に至る、義經の臣佐藤忠信が主人に代つて力戦したる古蹟なり、是より布引櫻、雲井櫻、瀧櫻等の珍品を見て、更に逆行して西行庵を訪ひ、此處を終點として吉野町に戻るを周遊の順序とす。

西行庵は、境内の幽邃なる點に於て、人寰を超隔したる點に於て、實に俗世を見限れる法師西行の庵所たるに背かず。「淺くともよしや又汲む人はあらじ我にことたる山の井の水」と詠じけるは、庵の片ほとりなる苔清水に事寄せたるものにて、俳仙芭蕉又此地に西行のおとを訪ふて「露とくく試みに浮世そがばや」の一句を遺して去りぬ。

愆くて吉野の歸路には、彼の吉野川を挟んで妹山背山の歌劇的紀念地あり、壺阪寺あり、金剛山あり、而して又幾多の見るべき地を此附近に遺脱すと雖も、其中の主なる所は頂を更へて紹介すべし。

### 其八 五畿内(下)

#### ◎大阪と大阪城

全●國●の●死●活●を●制●す●べ●き●大●阪●の●地●形——新●時●代●の●英●雄●信●長●の●炯●眼——大●阪●  
冬●夏●の●兩●役——秀●吉●と●家●康●人●物●の●對●照——眞●の●理●益●は●誰——千●古●の●恨●事

遠く三方に紫色颯はしき山岳を背景とし、西方深く大阪灣を抱いて、東西連絡の中樞を扼す。攝津大阪は實に天與の港なり、天與の都會也、而して天與の築城址也。曠世の英雄秀吉が信長の後を承けて、茲に地を相したるは、最も賢にして略の到れるものなりき、此故を以て吾人は大阪市その物を解剖するに先つて、大阪城の偉觀を鑑賞するの興味を抑ふる能はず。

抑も大阪城は、元と石山本願寺が據つて以て信長を惱ませし所にし  
て、天正八年本願寺退散後は、信長之を懷中に收めて何者をも城主に擬  
せず、早晩安土より此地に移轉すべく、假に城番を置いて之を守らしめ  
たり、蓋し戰陣に於ける鐵砲の利用と、之に伴ふ節制ある大軍の運用と  
は、織田氏の世に到つて著しき發達を示しぬ、同時に交通不便なる山間  
の僻陬に穴熊の如く立籠りて、防禦的専門の兵法は既に舊式に屬した  
るを以て、新時代の先驅者信長は、茲に戰國のレコードを破つて、四通八  
達の衝に當る水陸運輸の便を兼ねたる地に築城するの利なるに着眼  
しき、其一着手として江州安土に城を構へ、畿内、東海、東山、北陸の綜合點  
を把握し、入ては是等廣範圍の兵を集て自ら衛り、出ては兵を率ゐて四  
方を征するに便せしめ、更に山陰、山陽に版圖を開拓なし行くに隨ふて、  
安土も亦不便ならずとせず、茲に於てか大阪に的を定むるに至りし也。

大阪の地たる戰國時代既に日本一の境地と目せられ、即ち京都、奈良  
はじめ、當時外國貿易港たりし堺の地に程近く、加之、淀、鳥羽より大阪城  
の門口まで、通路直にして、四方に切所を抱へ、北は加茂川、白川、桂川、淀、宇  
治の大河流幾重ともなく、數里内には中津川、吹田川、神崎川を引廻し、東  
南は立田山、生駒山の連峰を眺望し、麓は道明寺川、大和川の流に、新ひら  
き淵、立田の谷水流合ひ、大阪の腰まで數里の間、江と河と續いて渺々と  
引廻し、西は滄海漫々として日本の地は申すに及ばず、朝鮮、支那、印度の  
船まで海上に出入し、五畿七道之に集り、賣買利潤の港なりと、其時代よ  
り稱讃を受けし天然の要害にして、坐ながら天下を制すべき形勝なれ  
ば、新時代の人物たる信長が此地を望みたるも亦偶然ならざるべし。  
而して信長は不幸にして中途挫折せしも、秀吉が此地に垂涎するの  
熱心は敢て信長に譲るべきにあらず、されば光秀を山崎に亡ぼすや、直

ちには大阪城番に内命するに、何人にも染指せしめざるを以てしぬ、然れども柴田一派の反対派に遠慮して暫く鋒芒を藏み、賤ヶ嶽の戦後天下漸く平定して、最早一人も己れに背くものなしと見るや、遂に積年の假面を脱棄して本性を露はし、即ち大阪城を我家として、天下の主人たるの意を公表するに至りぬ、これ天正十一年の事なりとす。

要するに信長が日本の羅馬法王たりし本願寺を大阪より逐ふて、秀吉が之を占めたるは、彼の平相國が一時福原に都を遷したるが如く、共に瀬戸内海の制海權を握らんと目的に外ならざりし也。

秀吉大阪に居を定むるや、銳意土木の工を督して、舊城を修補し、擴張して、天下の堅城たらしめたり、而して其結構の大袈裟なる、壘壁の高さ百二十尺、濠の深さ底を知らず、中央に五層の天守閣を作り、南は空濠、西は横濠、天滿川、猫間川を東北の外廓とする等、萬事秀吉式の偉大なる建

築也、されば此城に據つて、一たび天下に號令すれば、攻めて成らざる事なく、守つて永久の不落を呼號すべき空前の金城湯池たり。

秀吉此處に止る事數年、去つて伏見に徙り、此の湯池を利用するの雄圖を發表するに至らずして、慶長三年の薨去を見るに至りしが、彼の有名なる征韓の議を決したるは、實に大阪城内山里の茶室にてありし也、而も太閤没後、二十年ならずして、猶雄家康の爲に、折角の名城を滅茶苦茶に潰さる、可惜と云はんより、寧ろ天下の爲に痛嘆すべき也。

河と橋との大阪に到つて、紫雲の罩むる頃、頭を回らして、夕月出づる方を眺むれば、茲に豊公偉業の殘塊を認む、秀吉死後、此城悲劇の舞臺となつて、幾多の犠牲を地下に拂ひ、更に其大詰の幕として、日本一の大建築を瞬間の火に葬らしめ、阿鼻叫喚の修羅場を演出するに至つては、無殘と謂ふも愚に似たり、吾人溯想して、當年の境に會す、痛憤以上、更に有

意味なる熱涙の抑ふべからざるものあり、茲に於てか大阪冬夏の役を略説せざるを得ず。

大阪役の發端は、家康が秀吉の天下を奪はんとするに起りし事は世人の熟知するが如し、又東西兩軍の形勢、結果等は世人の知る所と大差なしと雖も、茲にその原因と成行とを記實體に略寫すべし。

慶長十七年、豊臣秀頼、京都方廣寺の大佛を再建するに際し、片桐且元を奉行人として巨鐘を鑄せしめ、僧清韓に命じて鐘銘を選ばしむ。鐘成り、十九年八月十八日を以て開眼供養を行ふに當り、家康、銘に「國家安康」の句あるを見て、己れを呪ふ意なりと做し、且元を召喚して大に之を詰責す。淀君、家康の怒甚だしきを聞き、侍女二人を駿府に派して家康に謝せしむ。家康、巧言以て之を引見し、又一言の鐘銘に及ぶなし、二女喜び歸つて此旨を致す。然るに且元に對する家康の對度は甚だ峻烈を極

め、淀君を關東に質するか秀頼を大阪より逐ふかの條件を以てす。且元、徳川と和親せんには二者その一を免れじと報告す。而も二女の言と齟齬する所あるより、淀君、且元が關東と謀を通ずるものと疑ひ、大野治長と謀つて彼を殺さんとす。且元之を聞き、遂に大阪諸門の管鑰を返し、大阪を辭して居城茨木に退隱す。大阪冬陣の導火は恁くして點せられたる也。

奸臣大野治長、先づ淀君、秀頼に説いて兵を擧げしめ、金力を以て士を募る。諸國の浪士及び關ヶ原役に討洩されて諸方に潜匿せる武士相率ゐて來り合す。旬日にして數萬騎を得たり。眞田幸村、後藤基次等を其最となす。而して大小の諸侯は皆な徳川氏を憚りて日和見鳥をさめこみ、應ずるもの多くあるなし。爲に大阪方の意氣頗る沮むと雖も、騎虎の勢中止すべくもあらず。即ち幸村、基次及び長曾我部盛親、木村重成等の謀

臣に集合軍を分率せしめ、東軍來れの防備兎に角整ひたり。

家康即ち秀忠と共に大兵を率ゐて來り攻め、連りに諸壘を抜いて遂に大阪城を圍む。家康密に人を遣はし、秀頼を諭して和を議せしむ。治長秀頼に勧め、伴つて和を請ふと共に、諸浪士を養ふが爲に封を増さん事を要求せしが、家康肯かず、和議破れんとせし時、家康再び淀君の妹を密使として大阪城に入らしめ、淀君秀頼に説き、諸浪士を逐ひ、周濠を填め、外廓を撤するを條件として和議漸く成る、之を大阪冬の陣となす。

翌年正月家康東に陣を歸すと同時に、奸臣治長、又も秀頼母子に説いて兵を起さしむ。諸國の武士募に應じて集る者前役に倍し、意氣頗る揚る。大野治長、治房、木村重成各一軍を領て、後藤基次、真田幸村等それ一方の謀將となり、秀頼自ら旗幟を備へて總軍を指揮し、軍勢大に揮ふ。此報一たび江戸に達するや、愨くと豫期せる家康、秀忠は直ちに諸將を

督して西上す。大阪方の諸將は皆な城を出で、敵を城外の曠野に邀ふ。後藤基次先づ進んで東軍の將水野勝成を撃つ。薄田兼相來り基次を援けしが、東軍は之を夾撃して西軍を走らしむ。基次兼相奮闘の末遂に死す。幸村急を聞くや直ちに驅來つて伊達氏の陣を搦きしが、伊達の軍騎戦を能くする者あり、馬上銃を放つて進みたるに、流石の幸村も辟易して退かざるを得ず。

一方木村長曾我部の二將は進んで家康の本營に迫る。井伊氏藤堂氏拒いで克く戦ふ。重成、單騎槍を揮つて挺進し、武者振の勇ましくも美事なる敵をして舌を捲かしめけるが、好漢遂に五月六日を以て、城外若江の露と消えぬ。

七日、真田幸村は茶白山に陣し、毛利勝永は天王寺に、大野治房は岡山口に在つてそれ軍に令す、而して東軍は岡山口に本多、前田、片桐の



勢を置き、天王寺口は淺野、秋田の諸將先鋒たり、藤堂、細川、井伊の兵は平野口より進んで眞田を攻む、幸村は之を一方に邀へ、一方は越前兵を支へて勇戦力闘せしが、流石の謀將も亦此一戦に討死するの已むなきに至りぬ、加之、西軍第一の軍略家大谷吉久も亦戦死す、茲に於てか東軍勢に乗じて大阪城を包圍す、勝負の數は既に決したり、家康使を遣はして和を議せしめしが、殘兵本丸にあつて猶敵を拒ぐ、然るに城中東軍に款を通ずる者ありて城内に火を放つ、東軍之を望見して急に突撃す、秀頼、淀君、火を櫛倉に避く、家康之を探知するや人を遣りて和議を促す、使者往復して議未だ決せざる時、井伊直孝銃を倉中に放つ、秀頼、和議遂に成らざるものと覺悟して、淀君主従以下、三十餘人と共に、猛火の中に自殺す、茲に於て、豊臣家全く滅ぶ、これ元和元年五月八日の事なりとす。

慘絶、悲絶、大阪の落城は、ドラマチックの模型として、實に有史以來の

事に属す、事が大袈裟なりしだけ、それだけ場面も廣く、賑かに結末を告げたるが、仔細に點檢し來れば、茲に花あり、實あり、血あり、涙あり、幾多錯綜せる紛擾は、怪漢家康をして掉尾の芝居を打たしむべく、最も好適なりし也、噫、秀吉逝いて十有六年、英雄偉業の紀念物たる難攻不落の大阪城をして、僅に一晝夜の間に灰燼に歸せしめたるを思へば、吾人豊臣氏の爲め同情以上更に讜憤を散ずるの策なきかを考量せざる能ざる也。

然し家康と云ふ爺さんも中々エライ男也、秀吉没後、二十年近くもかゝつて、やつと天下を手に入れたるは、寧ろ晩きに失するの觀なしとせざれど、そこがソレ上手で、コスくて石橋を叩いて渡る先生の遣口なり、慶長三年、既に大黒柱を失ひたる豊臣家は、如何に大身代と雖も、多寡が後家さんと腕白息子の屋臺骨にすぎず、十人の石田あつて、假に關ヶ原に勝ちたりとするも、百人の片桐、木村あつて、大阪を盛返さんとするも、

天下の大勢は動かすべからず、要するに秀吉が家康に先つて早世したるが、豊臣家の運の盡き也、之に反して徳川氏は運がよかりし也、吾人何やらの繪本に信長が團子を捏ね、秀吉が之を丸めて、餡粉を塗り、家康はお客然として出、來上りの團子を食し、居る圖を見しことあり、一口に云へば先づこんな工合なりしなるべし。

大阪城に關する項を結ぶに際して、茲に秀吉、家康二人物に對する短評を試みん乎。

約言せば秀吉は天才肌の英雄にして、家康は人事の及ぶ限りの力量を極度に發揮し得たる大人物也、一は進んで取り、一は守つて失はず、秀吉は亭主役とすれば、家康は女房役に比すべし、水到つて溝おのづから成る調略は秀吉の天品に屬す、家康に至ては溝を掘り、河を穿つて始めて水を導くの人才に過ぎず、故に秀吉の遺口には少しも斧鑿の痕を見

ざれど、家康の策略は一事一行悉く刀痕の歴々たるものあつて、所謂細工物たるの觀あるを免れず、二者人物の相違は、這箇に在り、世人動もすれば、家康を目するに、羨ても、焼いても、喰へぬ狸老爺の名を以てす、勿論小さな狸には相違なし、大なる老狸を以て目すべき底の巧者には、あらじ、若し狸の代名詞を以て、眞に大なる老狸を意味するものとせば、秀吉こそ當然その名を頂戴すべかりし也、大阪方へ喧嘩を賣るべき口實として、鐘の銘がどうか、恚うだとか、あんな拙い細工をする人物にして、如何ぞ狸たるの榮名を私すべけんや、家康のお臍たるもの、亦お茶を沸して可なりと謂ふべし。

始め秀吉、信長の命を承けて中國を狗ふ、發するに臨み、信長告げて曰、はく「能く功を成さば中國を擧げて汝に與へん」と、秀吉答へて曰ふ、「臣必ず中國を平定し續いて九州を征服すべし、君乞ふ中國九州の地

を以て有功の諸將に賞與せられよ臣は進んで朝鮮を席卷し、直ちに明の都城を陥れ三國を合せて一と成さん」と秀吉の大志恁くの如し、而して家康の器は奈何。

家康病篤く、死を悟るの枕頭に諸將を召し、告げて曰く「我死して後、將軍若し政を失はば、其の任に堪ふる者宜しく代つて海内に號令すべし、天下は一人の天下にわらず」と、諸侯唯々として退く、家康又將軍秀忠を召して曰く「吾今將に瞑せんとす、汝は天下は如何に成り行くと思ふや」秀忠答へて曰く「將さに大に亂るべきか」家康曰く「善し、若し命令に従はざる者わらば速に之を誅鋤し、親戚故舊と雖も決して釋すること勿れ」これ家康の遺言なり、諸侯に對する遺言と、嗣子に對する遺言とを比照し來れば、家康の人物を遺憾なく窺ふを得べし、前者に對して「天下は一人の天下に非ず」と言明し、其舌根の乾かざるに

「天下を望む者は肉身と雖も釋す勿れ」と嚴命す、同一人物の口より出でし言葉とは誰が耳にも受取難からん、但し人を欺くを以て英雄の一資格とせば、家康の遺言も亦英雄の斷片として納め置かん乎。

既に大阪城の址を、今の四師團に就て觀たり、之より市内の主なる所を巡覽して更に郊外に行くべく、先づ仁徳天皇々居の址なる高津の宮より案内すべし、大阪城の南市内の半都を瞰視するの高丘に、仁徳天皇の「高き屋に上りて見れば」の御製ありし高津の宮址あり、後年荒廢して殆んど見るに忍びざるものありしが、今改修して大阪の一名所とはなりぬ、次に見るべきは彼の有名なる難波御堂也、境内には芭蕉翁の絶吟と聞えたる「旅に病で夢は枯野をかけめぐる」の句碑を止め、蕉翁終焉の記念地たり、又南方に歩を運べば梅に名のある梅屋敷あり、生魂神社あり、更に南すれば家隆卿の「契りあればなにはの里にうつり

来て波の入り日を拜みつる哉』の歌碑ある夕陽岡に至るべし、丘上に立つて西方を望めば、遠く淡路島山に没せんとする夕陽の影寂しく、家隆卿の當時を偲ばしむ、それより茶臼山に大阪役の戦死者を弔ひ、而して大阪一の名所なる四天王寺に到るべし。

天王寺は日本佛教最初の靈地にして、今を去る一千三百餘年前、聖徳太子の草創せし古刹なり、爾來兵燹に罹ること二回、徳川氏の寛文年間に昔日の美觀に復す、壯麗なる五重塔、蓋々として九天に聳え、百三十三尺の高層に上れば、凛然として天外に飛躍するの感あり、而して聖徳太子を紀念すべく、世界第一の巨鐘を吊し、以て詣者の膽を奪ふ、浪華の地に遊ばん人には、逸すべからざる古蹟なり、それより道頓堀、千日前の繁華を見て更に西方を探るべし。

先づ安治川畔を傳へて築港を遠く望み、『海勢北に廻りて、海又海東

南望み、谿かなり、紀泉の間、西風吹送る、千帆の影、一々來り朝す、天保山』

河村瑞賢の遺跡として有名なる天保山は、安治川口に在れど、今は築港の大突堤に圍まれて見えず、『わびぬれば今はた同じ難波なる身を、つくしても逢はんとぞ思ふ』との百人一首にて有名なる、其落標は今尙は此沖にありて、大阪市の徽章に用ひられつゝあり。

北區には梅田を起點として、義經、景時争論の址として逆櫓の松あり、野田の藤花あり、凌雲閣あり、俳人西山宗因、大鹽平八郎の墓所あり、而して大阪名物の随一天滿宮あるを忘るべからず、菅原道真公を祀る靈地として、『満居常に慕ふ九重の天、日に御衣を拜して思、慘然一縷の餘、薫長く滅びず、延て香火萬堆の烟と爲る』の古詩を偲ばしむ、『雉も鳴かずば打たれまい、父は長柄の人柱』の俗語にて名高き長柄附近には孝徳天皇の宮址あり、亦た往いて見るべし、又泉布觀前より對岸櫻の宮の

長堤に架したる古式の長橋を淀川橋と爲す、櫻の宮の櫻花と相對して大阪の双美也、次で天神橋、天滿橋、難波橋等何れも水の大坂美を發揮せしむるに足るものなり、若しそれ大阪より水と橋とを除き去らば大阪の生命は零に等し、其他遊覽所としては中の島公園あり、豊國神社あり、網島の大長寺あり、何れも懐古の資料に乏しからず、他は略して更に大阪附近の史蹟を討ねん。

◎大阪附近の諸史蹟

楠公父子訣別の古跡——四條畷正行戦死の址——楠公の千早城——歌の名所と有馬温泉

大阪を中心として、之が四方に散在する史蹟を探らんに、山崎街道の傍には、楠公父子訣別の跡を以て有名なる櫻井驛あり、正成最後に、死を

決して湊川に赴かんとする際の事蹟は、普く人口に膾炙する所なり、太平記の所謂「今度の合戦、天下の安否と思ふ間、今生にて汝が顔を見ん事は、を限りと思ふなり、正成已に討死すと聞きなば、天下は必ず將軍の世に成りぬと心得べし、然りと雖も、一旦の身命を助からん爲に、多年の忠烈を失いて、降人に出づる事あるべからず、一族若黨の一人も死残りておらん程は、金剛山の邊に引籠りて、敵寄せ來らば、命を養由が矢先にかけて、義を紀信が忠に比すべし」と、己が忠魂を幼き正行に吹込みし所は、此の櫻井の里に外ならず、傳説には、此時正行十一歳の少年とあれど、實は二十歳以上の青年なりし事は、近世史學者の唱導する所也。

櫻井驛と聯關して忘る可からざる古蹟は、河内の四條畷なり、天平三年正月、楠正行父の遺志を繼いで、朝廷に忠誠を捧げ、其弟正時と共に高師直と戦ひし地は、今四條畷神社の南十丁の田野なりき、「正行は左右

の膝へ三所の頬先、左の目尻、篋深に射られて、其矢、冬野の霜に伏したるが如く折れかゝりたれば、矢すくみに立ちてはたらかず、其外三十餘人の兵ども、矢三筋四筋立てくれぬ者もなかりければ、今は是まで敵の手に懸るなとて、楠兄弟刺し違へ、北枕に伏しければ、自餘の兵三十二人、思ひくりに腹掻き切りて、上が下に重なり伏す」とあるより見れば、如何に其合戦の猛烈なりしかを察するに足るべく、而して楠氏の一族が、克く最後まで善戦苦闘して、忠誠を抽でしかを推知するに餘りあり、忠魂千古に朽ちず、今祀られて茲に在り、碑石の高さ三丈五尺、「贈従三位楠朝臣之墓」は傍なる大楠樹と俱に、永へに仰ぎ見らるべき也。

河内の南端葛城山脈と相對して、金剛山の古史蹟あり、これ南北朝時代、吉野山と共に最も楠氏に關係深き所にて、其山麓なる千早、赤阪の二城址は楠父子が賊軍に對して六韜三略の精髓を搾り盡くしたる地な

り、赤阪城址は金剛山麓に在つて、峭壁數十丈おのづから城壁の形を成し、頂上なる城址に立ちて望めば、攝河泉三州の風景は一々之を指呼すべし、正成當年此城に據り、北條氏の大軍を惱ましたる、光景宛として眼前に浮び來るを覺ゆ。

千早城址は荒涼たる一村落の上にありて、その規模甚だ小に過ぐ、憇る僻阪の地に八十萬の大軍を受けて奮戦したる正成の智略、實に驚嘆以上、奇蹟に價すべき也、城址の頂上には千早神社あり、楠正儀の墓あり、松籟颯々として、座る當年鞑鼓の音を偲ばしむ、而して南朝の未路を懐へば、實に無量の感慨なくんばあらず。

大阪市の南郊天下茶屋あり、住吉あり、共に大阪管内の遊覽地にして、南北朝以來の古戰場也、更に泉州に至れば、往昔外國貿易港として天下の海權を握りし堺市のあるあり、享保天文の頃、諸外國の船舶港内に輻

湊し、當時既に外國互市場の觀を呈したりしが、天正年間小西行長和泉の守護として此地に來り、豊太閤また政所を此所に置きて一國の政務を管轄してより、いよ／＼繁盛を極め、交通の便大阪を壓せんばかりなりき、而して風景の明媚なる、右に播磨の翠巒を望み、左に紀州の遠峰を繞らし、遙に淡路四國の遠山を青波の彼方に指呼すべく、白沙青松、暑を避くるに最も妙也、これより和歌山に入らんとするが道の順路なれど、一たび大阪に立戻つて、攝津の西北部を處分せざるべからず。

先づ池田、伊丹附近より探らんに、元龜天正時代、屢々攻伐の跡たりし池田信輝の有岡城址あり、伊丹黒染寺の境内には荒木村重の塔、俳人鬼貫の墓に次いで女郎塚あり、此塚、村重落城の時、城中の女子夥多、織田軍の爲めに燒殺されたるを憐み、後人の建立せるものなりと傳ふ、此地昔は猪名の笹原と稱し、大貳三位の古歌に「あゝ山猪名の笹原風吹け

はいでそよ人を忘れやはする」順徳院の御製「有馬山峰の松風音さえて猪名の笹原うづら鳴くな」等此邊歌の材料として最も多く用ひられたり。

更に尼ヶ崎に至れば、細川尹賢、荒木村重、池田信輝等の代り住みし尼ヶ崎の古城址を見るべし、豊臣秀吉が山崎合戦の記念地として亦忘る可からざるの地なり、これより攝津の最北部には有名なる有馬温泉あり、温泉は遠く神代より湧出し、歴代の諸將名士、茲に來つて浴せし者亦多かるべし、浴場の構造は上古の宮殿風に擬し、有馬山の風景と併せ見て頗る調和の宜しきを得たり。

附近の名所としては、豊公北政所の建設せる温泉寺あり、境内の清涼院には平清盛、豊太閤等の舊蹟を印す、是より一溪川を隔て、三好宗三の據りし城山の古城址あり、次に鼓の瀝は有馬の町を距る八町、高さ三

丈幅一丈八尺に過ぎざる小瀑なるも、境の幽邃なるおのづから一勝區を爲す。殊に晩秋紅葉の候は、萬天萬地、黃緋の錦繡を以て綴りなされ、山の赤き、水の碧き、石の白き、人をして恍惚たらしむるものあり。飛鳥井卿曾て有馬六景を選み、鼓灘の松風、有明樓の春望、落葉山の夕景、温泉寺の晚鐘、功地山の秋月、有馬富士の雪と爲す。功地山は、孝徳天皇の行宮の址にて、有馬富士は其名の如く秀麗を極め、四時俱に神境に在るを思はしむる山水の美に富む。兎に角、有馬の温泉は、史蹟以外、更に俗を避けて心身を養ふに足るの地たるを疑はず。是にて大阪附近の頂を結び、西して神戸方面を説明するが順序なれど、大阪以南尙ほ紀州和歌山の一角を遣せるを以て先づこれより案内せん。

◎和歌山方面の諸史蹟

和歌浦の紀景——高野山と秀夫自殺の跡——熊野川の奇蹟——那智山と

文苑上人の荒行

「沖の暗いのに白帆が見える、あれは紀の國蜜柑船」との俗語にあるその紀の國は地圖面上南海道の部に屬すれど、大阪方面よりする鐵路の便宜上茲に收むる事とはなしぬ。

紀の川を横に抱き、瀬戸内海の頭部を前に望み、歌に名高き和歌の浦を一眸の中に開展せる紀州和歌山市は、舊徳川氏の親藩、紀州侯の城址なる事は、世人の熟知する所也。

吾人此地に會遊して、史蹟以外、先づ和歌浦一帯の風光に恍惚たらざるを得ざるものありき。されば「一に權現、二に玉津島、三に下り松」云々の歌以上、更に多くの名所を發見するに難しとせず、市の中央より南一里にして五百羅漢寺あり、それより玉津島神社に至れば、鳥居前なる



入江に三個の斷橋を架し、之を隔て、一抹の青松、海波に綠影を宿すを見るべし、更に頭を回らせば、華表高く波上に峙立する東照宮をはじめ、奥の窟、不老橋、養珠寺、妹背山、觀海閣等の名勝古蹟、繪の如く點綴せらる。芦邊の茶屋は玉津島神社に當りて、美しき入江に面し、此樓上より望めば風景の絶美なる、嚴島を縮寫したるが如し、芦邊の茶屋に船を裝して、海路對岸の紀三井寺に到るべし。

紀三井寺は西國三十三番の靈場中、第二の札所にして、巡禮の詠歌を誦すべく、最もふさはしき名勝也。此寺名草山の山腹に位して、和歌の浦輪を一時の中に集む、若しそれ本堂の欄に凭れて彼方を眺むれば、げに天下の名所といふ名所を、此の山水の間に網羅して更に天工を加へし、至妙の景を配出せしが如く、一見風光に眼を驚かし、再び見ては拍手に價するの絶勝也、祇南海が『天下三十三福地、此山亦古靈場、潮音梵に和

する蓮洋洞、林樹花に起つて、雨露香し』と微吟するも、尙ほ全景を盡さざるの憾なき能はず。

和歌山市より紀和鐵道に乗つて、那賀郡に入れば、古來僧徒の武威を以て天下に鳴らしたる根來山根來寺の巨刹あり、元龜天正時代屢々織田氏を惱まし、遂に信長、秀吉の烈しき攻撃に逢ひて、一時全く滅亡に歸したるが、其後再興して大伽藍を修築し、今は眞言宗新義派の總本山として有力なる寺院に屬す、それより紀の川を渡つて北に進めば、之も西國三十三番第三の札所なる粉河寺あり、此寺も亦根來寺と共に、時の武將に反抗せし爲め、五百六十餘の僧坊は豊臣秀吉の爲に燒盡せられしか、徳川氏の世に至つて、再興せし也。

紀州の東端、往時女人禁制の靈地として有名なる高野山のあるあり、此山に到る路には眞田幸村が、其父昌幸と共に蟄伏せし九度山の居址

あり、更に岩不動、袈裟掛、松稚兒、花折阪、女人堂等を経て山に上れば、天下の名刹金剛峰寺に達せん、これ眞言宗の開山、空海(弘法大師)上人が弘仁七年嵯峨天皇の勅允を請ひ、國司の力を藉りて高野の山原を穿り、夷げ、七堂伽藍を創立したるもの、輪奐たる堂宇、壯麗なる僧坊、山に據り、谷を填めて、唄音經聲の盛なる、實に海内無双一と稱せらる、而してその堂宇中、史蹟として著名なるは、豊臣秀次自殺の室たる柳と稱するもの、これ也。

紀州の南部、熊野川の畔なる本宮町より新宮町に至る間には、古來有名なる熊野神社の三山あり、熊野川、大和の國境より北に流れ來るの所、熊野神社の大華表は屹然としてその流に臨む、而して熊野神社は、本宮町に在つて、崇神天皇の六十五年の御草創にかゝり、熊野三山の第一山と稱せらる、其靈驗の赫著なる、歴代皇室の御尊崇と、諸名將の信仰深かりしと、併せて俱に宇内有數の史蹟たり。

熊野川の奇は蓋し天下稀に見るものなるが故に、是より乗合船の便に乗じて新宮町に下るを可とす、本宮を出で、屏風島を過れば、深潭量るべからざる網代ヶ淵は、竊然として、其前に開け、五十丈餘の大巖、將に船中に倒壊せんか、と危され、過る者をして思はず、手に汗せしむ、佛岩三重岩等を左右に見て、宮井に至れば、北山の長流、東より來り、會して風光いよ、美なり、更に下れば、川は屈曲して、深山の中に入り、右に布引の瀧、左に吹雪の瀑布を懸く、此間山影は山影と相戦ひ、溪流は溪流と相咬んで水鳴り、石走り、舟の震盪すること、臆病漢の膽を奪ふものありと雖も、亦天下の奇觀たるを失はず。

悉く熊野川の海に注がんとする頃、世に熊野新宮神社と呼ぶ速玉神社の所在地なる新宮町に着すべし、此宮、熊野三山の一にして、景行天

皇の御宇に建てらる。之より西約三里にして、古來瀧の名を以て有名な古蹟那智山熊野權現社に至るべし。

那智山權現の地たる、人をして如何に深山の中にあるかを想はしむれど、其實下駄穿きにても詣で得る淺き山也、然れども靈驗のいやちこなりと傳ふる、他に類例稀なるべし、而して那智權現と俱に著名なる那智の瀧は、古來日本一と稱せらるれど、之は聊か其名高くして實の伴はざるもの也、されど海内有數の名瀑と呼ぼるゝだけに、流石に雄大の觀あつて文覺上人の荒行を偲ばしむるものあり。

治承の昔、北面の武士として録々の名ありし遠藤武者盛遠、其戀營渡邊巨を斬らんとして、誤つて却て己が戀人なる袈裟御前を殺したるより、一念茲に發起して年十九の若盛りを髪を切りて僧文覺となりたるの一事は、能く脚本に小説に芝居に詩化されつゝあり、而して僧文覺は

熊野に詣りて那智の瀑下に行を修したりき。次は十二月十日餘のことなれば雪降り積り氷柱凍て谷の小河の音もせず、峰の嵐吹き氷り瀧の白糸垂氷となりて、皆な白妙におしなべて、四方の稍も見え分かず、然るに文覺瀧壺に下りひたる、首際つかりて、慈救の呪を見てけるが、二三日こそあれ、四五日にもなりしかば、文覺堪へず搔きよりぬ、數千丈張きり落つる瀧なれば、なにかはたまるべき、颯とおし流され、刀の刃の如くに、さしも殿しき岩角の中を、浮きつ沈みつ五六町こそ流れければ、時に美しき童子一人來りて、文覺が手を取りて引上げ給ふ、人奇特の思ひをなして、火を焚きあふりなどしければ、定業ならぬ命にてはあり、文覺程なく息出でぬ、大の眼を見瞋らし、大音聲をあげて、我れ此瀧に三七日打たれて、慈救の三洛又を見てうと思ふ、大願あり、今日は僅か五日にこそなれ、未だ七日だに過ぎざるに、何者かこれまでは取りて來れるぞといひ

ければ聞く人身の毛よだちて物云はず又瀧壺に歸り立ちてぞ打たれける』とあるより見れば、那智の瀑布の一端を想像なし得べく、而して文藝上人が如何に鐵石の魂を以て初一念を貫かんとせしかの意氣を察するに足るべし、源頼朝をして伊豆に兵を擧げしめたるは、即ち此僧の勸めによるものなりと傳ふ。

是にて南紀の地を一先づ切上げ、更に關西神戸方面に向ふべし。

◎神戸須磨方面

兵庫の二大史蹟——福原と淡川——清盛傳業の夢のあと——平相國の大  
 隠見——平家の末路——正成決死の意氣——絶代の快骨淡——須磨浦の  
 美と詩的戰爭

大阪神戸の間には船あり、汽車あり、電車あり、電車に乗れば京濱間の

それよりも快速力を以て至るべし、而して神戸に至れば、歴史に逸すべからざる二大古蹟あり、一は平清盛の福原遷都、一は楠公淡川戦死の事蹟なりとす。

蓋し神戸の地、瀬戸内海より大阪灣に入らんとする咽喉を扼し、横濱と俱に宇内第一の貿易港たり、吾人は楠公その他の諸史蹟を探るに先ち、溯つて七百餘年前の懷古を禁する能はず、平相國が此地に都を遷したる、蓋し瀬戸内海の制海權を握らんとするの政策より出でたるものに相違なきも、一は所謂山法師共の邪魔を避けて、政權を専らにせんとする驕傲心に因るものなりとす、されば福原の内裡を咸陽宮に擬し、己れを秦の始皇に擬して、勢ひ王位を凌ぎ、天つ日を煽ぎ返さんとまで息捲きたれ、當時「舊き都を來て見れば、淺茅ヶ原とぞ荒れにける、月の光は限なく、秋風のみぞ身には沁む」と今様に歌はれしより見ても、如

何に王權の衰へしかを知るに足るべく、恁くて清盛海を埋むるに人柱を以て經ヶ島を築かする等の横暴を極めしにぞ、兎角福原に遷都してより「夢見も悪しう、常は心騒ぎのみして、變化の者ども多かりければ」流石横紙破りの淨海入道も久しく居堪らず、再び舊都に還りけるが、民心既に離叛して清盛は煩々裡に病没す。而して源氏の起ると共に、平家の一門は、壽永の初年に至つて、遂に都を逐はれて、所謂福原落の衰運を見るに至りぬ。

「明けぬれば福原の内裡に火を掛けて、主上をばじめ參らせて、人々皆御船に召す都を出でし程こそはなけれども、是も名残は惜かりけり、海士の焼く藁の夕煙り、尾上の鹿の陸の聲、渚々に寄する波の音、袖に宿かる月の影、千草にすだく、蟋蟀のきりきりすす、すべて目に見、耳に觸る、この一として、哀を催し、心を痛ましめずといふ事なし、昨日は東關の麓

に書を並べて、十萬餘騎、今日は西海の波の上に纜を解きて、七千餘人、海雲茫茫として、青天既に暮れ、なんとする、孤島に夕霧隔て、月海上に泛べり、極浦の波を分け、沙に引かれて行く船は、半天の雲に湖る、日數経れば、都は山川程を隔て、雲井のよそにぞなりにける、遙に來ぬと思へども、唯だ盡きせぬは、涙なり、波の上に白き鳥の群れるを見給ひては、彼ならん、在原の某の隅田川にて言問はん、名も陸まじき都鳥かなとあはれなり、壽永二年七月廿五日に、平家都を落ちはてぬ」との平家物語の名文は、よく平氏の末運を弔ひき、而してこれを須磨一の谷の合戦の序幕なりとす。

吾人神戸の地に到つて平家の昔を憶ふ、延て淨海入道清盛の爲に、一掬同情の熱涙なき能はず、世人動もすれば、渠を目するに天子を擁して暴威を逞ふするの横道者なりとするも、吾人は敢て然らず、寧ろ清盛を

偉人の一個として史上に光彩あらしむるの然るべきを信ず、平家の没後、源氏の世及び源氏系統に属する主権者を戴くの後世に於て、平家を利すべき證據物件は悉く湮滅せられ、加ふるに、源氏系統の作者が、自派に都合よき記録のみ多く遺し、が故に、一世の快男兒たる清盛も亦一個の横紙破として傳へられたるに外ならず、勿論渠には幾多の缺點ありしに相違なし、而も這の缺點を補ふて餘りあるべき長所を斟酌せざるべからず、要するに、渠は小兒の如く無邪氣にして、我儘至極なる野生的の英雄也、萬人の眼孔盡く小島内の天地に踞踏たる時代に當つて、彼は能く我邦千年の長計たる海外に發展するの雄圖を拓き、榮螺の殻中に潜むが如き平安の城を出で、海を家と爲すの地に帝都を遷し、天與の海港を成す福原を以て世界的海外貿易港を營むべく、瀬戸内海の路を開き、將に大に爲す所あらんとしたる也、然るに、渠が雄圖は餘りに大

にして、時人と懸隔し、却て人心を失ふの因となりしこそ遺憾なれ、恁る大識見を有する點より見れば、源頼朝が徒に自己の勢力をのみ扶植せんと焦心せし蹟に比して、遙に偉大なるもの無くんばあらざる也。  
神戸の一端、今這の快男兒の跡を偲ぶべきものは、一清盛の塔に過ぎず、十三層の石塔、高さ二丈六尺の紀念物は、未だ清盛の大を表頌するに足らず。

清盛の塔と共に忘るべからざるは、楠公、湊川の古蹟なり、正成討死の地は、福原町の南端、湊川の一角なるが、今當時の狀を偲ばんに、延元々々年五月、足利尊氏、九州より大軍を集合して、大舉内海を來上す、是に於て天皇、新田義貞を援けて、楠正成に尊氏の軍を討たしむ、正成、遂に己が意見の用ひられざりし者ありしが、公私混合すべきに非ず、今は一死君恩に奉ずるあるのみとして、五月廿五日、弟正季と俱に、出で、湊川に敵を邀

ふ、接戦數十合、正成挺身僅に七百騎を提げて五十萬の大軍に當り善く  
 戦ひよく拒ぎしが、衆寡の差、天淵も雷ならざるに、味方の勢亡び、遂に七十騎を剩すのみとはなりぬ。恚ては如何に鬼神を欺くの謀將と  
 雖も、瀕瀾を挽回すべくもあらず、而も一方の血路を開いて落んとすれ  
 ば、落延るの策無かりしにもあざりしが、正成京洛を出でしより、世の  
 事思ふに任せず、今はこれ迄なりと覺悟して、一步も引かず奮闘す。『楠  
 既に疲れければ、湊河の北に當りて在家の一村ありける中へ走り入り  
 て、腹を切らんために、鎧を脱ぎて我身を見るに、斬傷十一箇所までぞ負  
 ひたりける』而して自餘の兵七十二人も亦數ヶ所の傷を蒙らざるは  
 なし、正成一同と俱に念佛を唱へたる後、弟正季に向つて最後の願ひは  
 なきやと問ふ、正季からく「と大笑して答ふるらく『七生まで只同じ人  
 間に生れて、朝敵を滅さばやとこそ存じ候ふ』」と之を聞く、正成も亦同

意の喜色を見はし、『罪業深き惡念なれども、我も左様に思ふなり、い  
 らば同じく生を替へて此本懐を達せん』と盟誓し、兄弟共に刺し違  
 へて同じ枕に臥したりき。

この斷末魔、稍や後人の誇張せるものあらんも、楠氏一族が忠誠は有  
 史以來の美談たるを失はず、今、湊川神社と祀られて、『嗚呼忠臣楠子之  
 墓』は千載に朽ちざるもの也、唯だ憾むらくは境内俗惡の地に接して、  
 忠臣の魂を祀るべく餘りに清雅を缺く、空前絶後の俠骨を抱ける熱血  
 漢正成にして若し靈あらば、嗚かして地下に怒盛しつゝあるなるべし。

之と連關して仰ぎ見るべきは、湊川神 境内に於ける伊藤博文公の  
 銅像なり、一時彼是の世評ありしが、吾人を以てすれば、楠公廟の傍に伊  
 藤公の像を置きしとして、何等の支障あるを見ず、正成を武道の忠臣とす  
 れば、博文は文道の大忠臣なり、文と武との差のみ、國家に致せるの功果

は、藤公敢て楠氏に及ばずと傲す能はざるべし、南北朝の忠臣と、明治の偉人と茲に双立す、亦神戸の偉觀也。

一括して神戸名所を擧ぐれば、三の宮停車場の北數丁にして生田神社あり、神功皇后、攝政元年の創建にして、稚日女尊を祀る。源平戰役中、梶原景季が艦に梅枝を挿みて奮戦せし生田の森は、今尙ほ社後に存す。紀念の枯梅、梶原の井、敦盛萩等を巡覽して、東北に進めば、布引山の布引瀧に至るべし、幅十尺、高さ七十餘尺の大瀑布、曲折して下ること、恰も素練を懸くるに似たり。以て布引瀧の名に背かず、是より摩耶山を遙に仰いで須磨の浦に行かんか。

青松白沙の間、長汀一帯の笹緑をなして、遠く明石の浦に續き、靜岡忙帆の彼方、淡路島山の青黛を煙波の間に望で、後に鐵拐山の翠崖を負ふもの之を須磨の浦となす。王朝の美人小野小町をして、『須磨の浦浦漕

船の楫を絶え寄る邊なき身ぞ悲しかりける』と詠ましめたるは、此浦なり、『わくら葉に問ふ人あらば須磨の浦に藻鹽たれつ』と答へよ』と中納言行平が夢の跡、『淡路島通ふ千鳥の啼く聲にいくよ寝覺ぬ須磨の關守』と歌はれし關屋の跡も亦此所なり、而して此の詩に富み歌に富み、風光に富む海濱を背景として、源平壽永の戦ひは開かれき、風景その物の美に加ふるに、戦争の美を以てす、憊るが故に須磨は詩化せられ、戦争は美化せられたり、安徳帝の行所在たりし内裏路に隣して一の谷、二の谷、三の谷と連なり、源九郎義経が平家の背後を襲ひたる鵜越は、攝播の境にあり、熊谷直實が平の敦盛を討ちたる海濱は、夕潮徐るに去來して、御座船指して漕出でたりし、晝眉涅齒の若武者を、今目前に想起せしむ、其敦盛の塔は停車場の西十數丁の國道に在り、須磨に客たる人、先づ之を訪ふて次に松風村雨の二女が墓を弔し、さて須磨寺に



賽して音に高き青葉の笛に往古の詩魂を招致すべし、「熊谷浪打際にて押し並べむづと組みてどつと落ち取りて抑へて首かゝんとて兜をおしのけて見たりければ薄化粧して鐵漿黒なり我子の小次郎の齡程して十六七ばかりなるが容顔まことに美麗なり。」熊谷殺すに忍びず和殿は何人なりやと問ふに少年答へて先づ汝こそ名乗れよと反問す。「ものゝ數には候はねど武藏國の住人熊谷直實と名のり申すさては汝が爲には好い敵ぞ名のらすとも首を取りて人に問へ見知らうするぞ」と少しも悪びれざるの覺悟のよきに熊谷天晴の大將軍ならんといよ／＼刃を下しかね此少年一人殺せしとて軍の勝となる譯にてもあらじ、「今朝一の谷にて我子の小次郎が薄手負ひたるをだにも直實は心苦しく思ふに此殿討たれ給ひぬと聞き給ひてこそは歎き悲しみ給はんすらゆ」助けやらんとて後方を顧みる折しも味方の軍兵に

其態を認めらる熊谷あまりのいとをしさに「何處に刀を立つべしとも覺えず目もくれ心も消え果て前後不覺に覺えけれどもさてしもあるべきことならねば泣く／＼首を掻きたりける」這の一事は千古の美劇として傳ふる所吾人今茲に眞偽を問ふの冷血を有せず之を一場の詩的悲劇として腸の九回するものなくんばあらざるなり尙ほ須磨寺の寺寶として青葉の笛の外敦盛の自筆の和歌直實の筆「一枝を折らば一指を切るべし」の櫻の制札母衣絹の名號赤旗の名號等何れも當年を偲ばしめざるはなし僧に請うて一覽を得たる後出で須磨浦の風光を望まば又一段の情趣深かるべし。

一の谷を境として西は播磨に屬す去つて山陽線に搭じて舞子明石の風景を語らん乎。

星の夜に潮風颯也、客舎の酒淋しうして、緩き  
 波音を海神の女豊玉姫の奏樂と聞く、寝ねん  
 として火桶の親しむべきを覺ゆ、恐らくは、露  
 天の下に座し給ふ大佛の御身の花に冷えて、  
 長谷の里に春の夜寒を醸したるなるべし

# 日本名勝史蹟 天の巻終

明治四十四年四月十五日印刷  
 明治四十四年四月十七日發行

名勝史蹟天の巻  
 定價金八十錢

著者 伊藤 銀月

發行者 前川 又三郎  
東京市京橋區中橋廣小路六番地

印刷者 金子 久太郎  
東京市京橋區弓町二十四番地

印刷所 三協印刷株式會社  
東京市京橋區弓町二十四番地

不許 複製

發兌元

東京市京橋區中橋廣小路  
 三十七番地

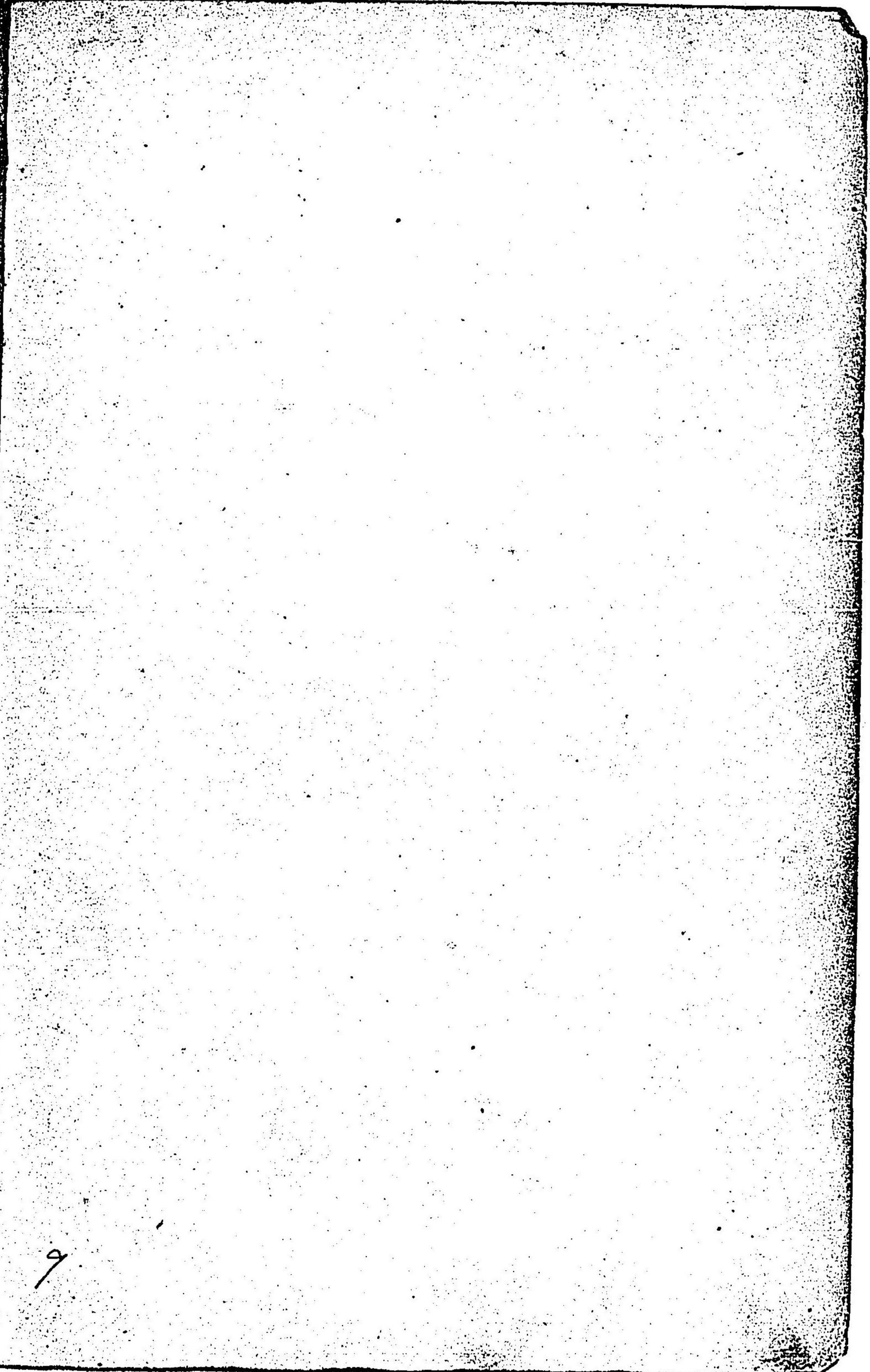
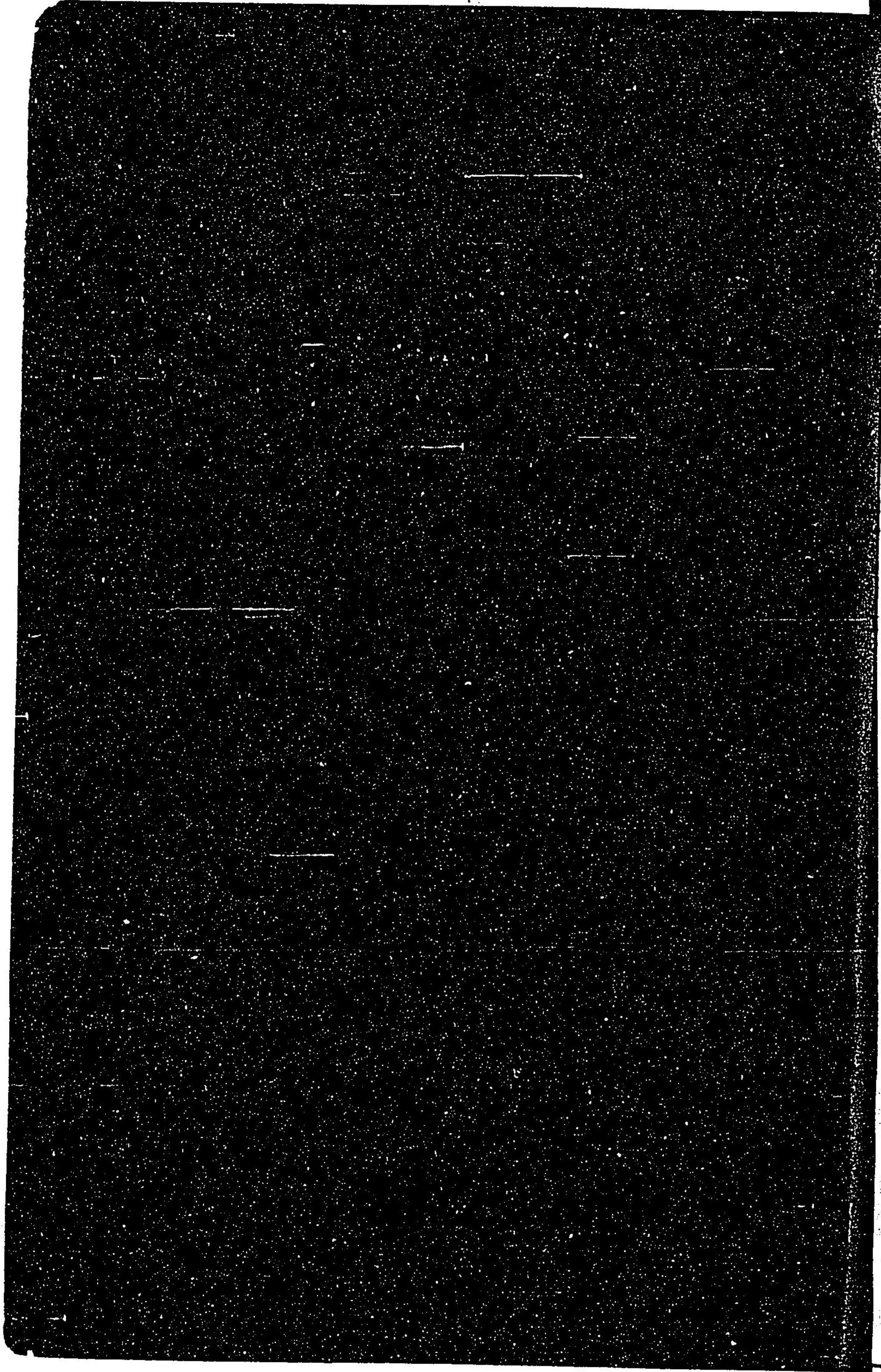
前川文榮閣

著 生 先 月 銀 藤 伊

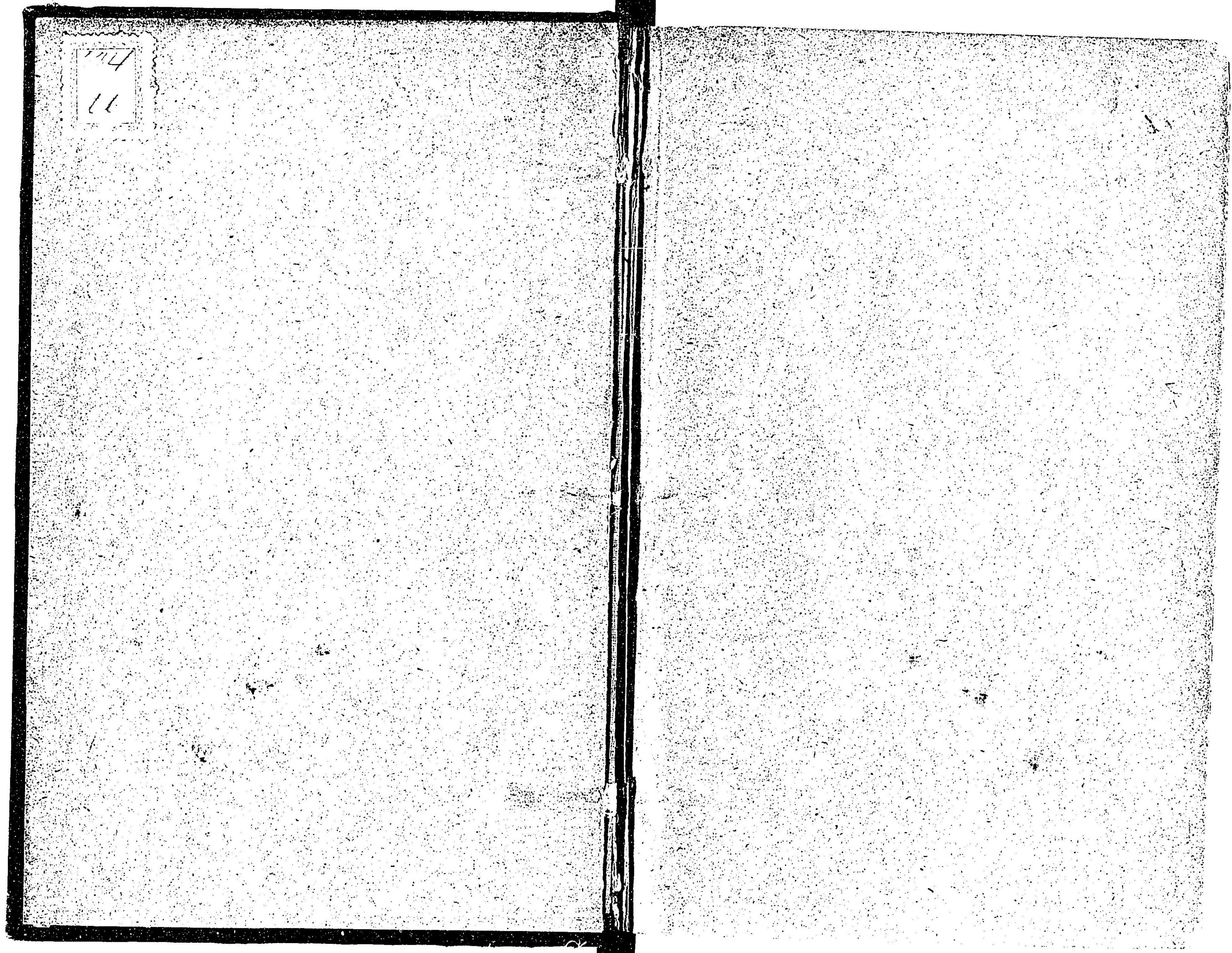
# 論 新 景 風 本 日

日本の世界に誇るべきは、戦争に強さと風景に勝れたるとの二點也、此、絶美なる風景の間に生れ落ちて、活ける繪畫の上に生活する日本人は何等の幸福なるぞ、而も、何に由つて日本の風景は絶美なるを得たる歟、何が故に日本の風景を絶美なりとなす歟に就いては、今日迄に試みられし諸家の議論未だ剴切精透なりと云ふべからず、此に於て著者獨得の詩想に科學的智識を融合せしめ、敢て日本の風景を問題となして斬新卓抜なる議論を試む、理趣情景兼ね至れるもの、天下本書を措いて他に求むべからざる也、江山筆底に湧き花葉毫端に發するの絶妙好辭を以てして、嚴密なる新科學の上を猛進しつゝ、一步も軌道の外に逸せず是れ獨り著者の大傑作にして明治の珍書なるのみならず、亦刻下の著述界に新潮を注入して讀書子の耳目を一洗せんとする革命的著述也、之を讀まざる者の頭腦は恐らく腐朽せん。

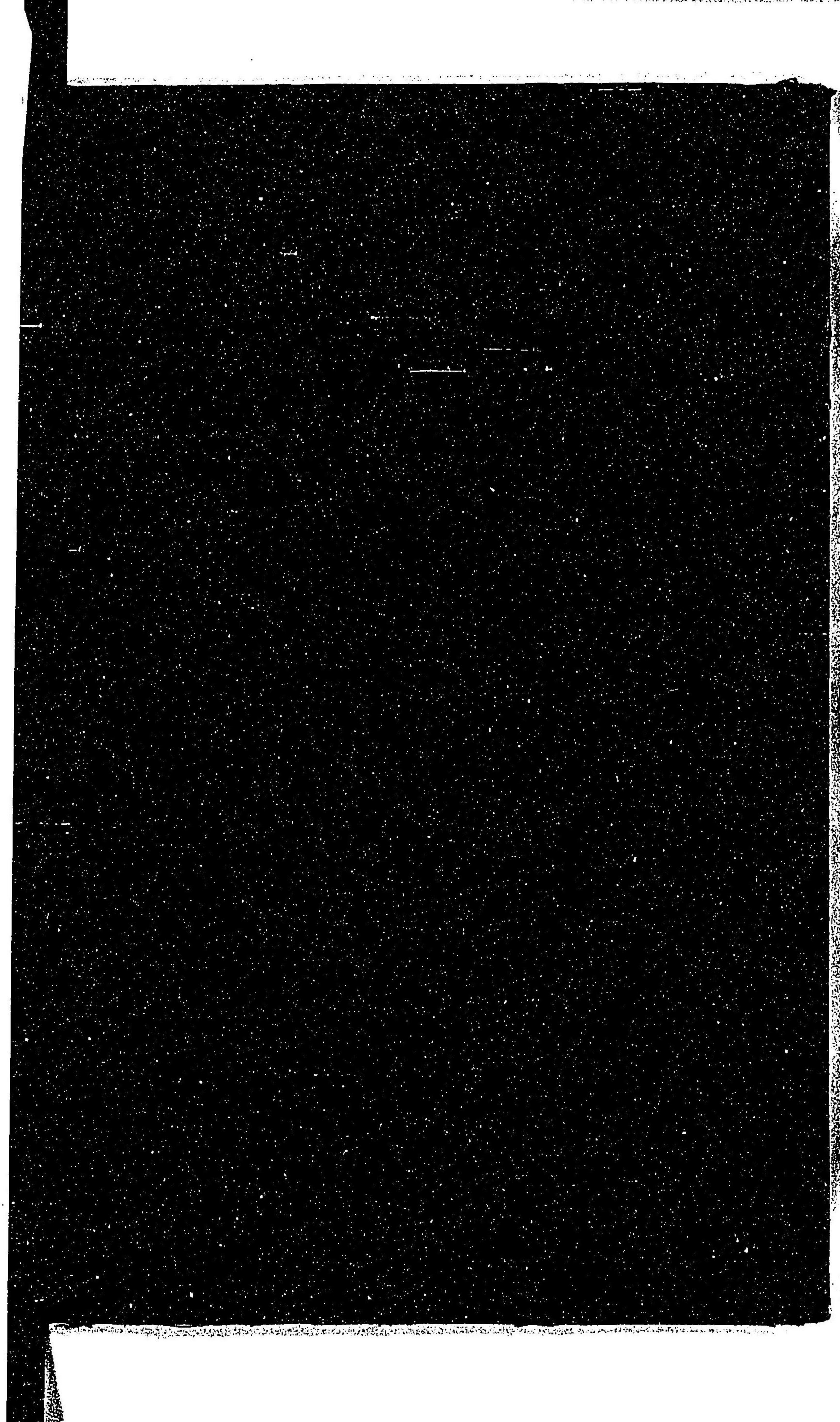
裝 釘 瀟 洒 全 壹 冊 定 郵 價 稅 壹 拾 圓 錢



9



717  
11





023049-001-3

334-66

日本名勝史蹟

伊藤 銀月/著

天

M44

ADB-1025

